

高町ヴィヴィオの初恋

胡麻胡椒

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年と少女が恋をした。

それは人間としてごく当たり前な情動で、どこにでもありふれた出来事であり、幸せな光景として祝福されるべきことであるはずだった。

目次

早朝のボーイミーツガール	1
早朝のボーイミーツガール2	9
はじめまして	19
娘の事情	33
親子のかたち	41
気付き	56
Lの一番長い日	65
Lの一番長い日2	74

早朝のボーイミーツガール

場所はミッドチルダ北部、ベルカ自治区の都市部に程近く。

ルシウス・マリウスはそこに住む、会社勤めの父と、結婚してから主婦業に専念する母の間に産まれた。

母譲りの深い栗色の髪と瞳を持つ彼は、現在は17歳、高等科に通う学生だ。

先祖まで遡ると聖王に仕えた由緒正しい騎士だとは母方の爺の言だが、その血が濃く出たのかルシウスはベルカ式魔法への高い適性がある。

現在時刻は早朝の四時半頃。

ルシウスは日課のストライクアーツのトレーニングの為、森林公園に併設された魔法練習場に来ていた。

ベルカ自治区はミッドチルダの中でもこういう自然が多く残されている地域だ。

随分と早い時間だが、ルシウスは人がいない早朝の森林公園の凜と張りつめたどこか神聖な空気が好きだった。

ただしその日、ルシウスが先日の17の誕生日に与えられたデバイスを手首に巻いて練習場に行ったところ、一人の先客がいるようだった。

ルシウスと同じか少し下くらい歳の頃の少女。

金色の長い髪はサイドテールに括られていて、その動きに合わせて跳ねる様子はどこか活発で元気な印象を抱く。右が翠、左が朱という珍しい虹彩異色の瞳はキラキラと好奇心に輝いていて、希望に溢れているようだ。

どこことなく見た目よりも幼い雰囲気を持つ少女だった。

彼女は、格闘技ーールシウスにはミッド式ベースのストライクアーツだと分かったーの型の練習をしているようだった。

ルシウスがある程度距離をとって自分も日課のストライクアーツの練習をしようかと構えを取った所で、少女はルシウスに気がついた

らしくペコリとお行儀よく会釈したので、ルシウスも小さく会釈を返しておいた。

この時の彼は自分一人の神聖な時間へ入り込んで来た異物に、少しだけ不愉快な気持ちを抱いただけだった。

翌日も彼女はいた。

前日と同じ場所で黙々と型の練習をしている。

少女はルシウスに気がつくつと、またペコリと会釈して、型の練習に戻る。

この調子で彼女が来ると、自分一人の時間はしばらく無いのだろうかと少々不満に思いつつ、ルシウスも同じく小さく会釈を返して日課の練習を始める事にした。

ルシウスが一通りの型の確認を終え、一息ついた時にふと少女の方を見ると、彼女とパッチリ目が合った。

それに気がついた少女は慌てたようにそっぽを向いて自分のストライクアーツの型の練習を始める。

ルシウスとしても少々気まぐしい気になりながらもそっぽを向いて小休憩すると、また型の練習を再開した。

同じストライクアーツとあってかルシウスも少女の動きが気になってしまい、休憩の時などつい少女の動きを目で追ってしまっている自分がいた。しばらくして少女と目が合い、慌てて反らす。

逆にふと少女の方を見るとパッチリ目が合い、お互い慌てて反らすということも幾度かあった。

そんな日々が続いて一週間ほど経った朝。ルシウス一人だった時間に少女という異物が混ざる事に慣れてきた頃。その日も彼女はルシウスより先に来て、いつもの場所で一人型の練習をしていた。

ただその日はいつもと異なり、練習場にルシウスが来ても会釈をしなかった。何となく居心地の悪さを感じたルシウスはさりげなく少女の動きを観察してみると、今までに比べて動きに精彩を欠いている様に感じた。

今までは全身から楽しさが滲み出ているようだったが、その日はどことなく追い詰められているというか、余裕が無いように感じられた

のだ。

実際、今までならば躓かなかったような所で何度もミスしている。彼女に何かあったのは明らかだった。

二度三度と逡巡したが、ルシウスは少しだけ勇気を出した。

「あの、おはようございます」

「ひゃっ!? え、あつ…… お、おはようございます」

少女は随分と驚いたようで、ルシウスが声をかけると肩を大きく跳ねさせて、振り向いた顔は大きな目をまん丸に見開いている。

近くで見るとその虹彩異色がよく分かる。

とても綺麗な瞳だとルシウスは思った。

「あ、えと、いきなり話しかけて驚かせちゃったみたいですね、すいません」

「い、いえ！ わたしこそ気がつかないでごめんなさい。えつと、それでどうしましたか？」

少女はある程度驚きが落ち着いたのか、にっこりと花が咲くような笑顔を浮かべて用件を問うた。見る人全てを幸せにするような笑顔だ。

ルシウスは困った。特にこれといって用事があつて話しかけた訳ではないのだ。

「いや、特に用事があつて話しかけた訳じゃなくて。ただ毎日見かけるのに挨拶もしてないと思ひまして……」

「え!? 嬉しいです！ わたしも挨拶したかったんですけれど、ご迷惑かもしれないって思うとなんだか勇気が出なくて。でもお話ししてみたいとおもつてたんです！」

少女は照れ臭そうにはにかんだ。その言葉に少しの疑いも持てないくらい、あまりに嬉しそうな顔を見て、ルシウスの心臓が少し跳ねた。ルシウスは学校でも割りと女性にモテる方だし女性に慣れていない訳ではないが、同年代の少女でこんなに素直な感情表現をする女の子は初めてで、戸惑うと同時に気恥ずかしさを感じてしまう。

「そう？ なら話しかけて良かったです。あ、俺はルシウス・マリウスと言います。お名前をお聞きしても？」

「はい！ わたしは高町ヴィヴィオです！ はじめまして、ルシウスさん。ヴィヴィオって呼んでください。よろしく願います！」

少女ローヴィヴィオは、自己紹介をする時、本当に嬉しそうだった。その笑顔を見て少し赤らんでしまった顔が朝日に隠れてくれたのは、ルシウスにとって幸運だったのかもしれない。

しばらくお互いにストライクアーツの話題で盛り上がった。ヴィヴィオはストライクアーツが本当に好きなようだが経験年数はルシウスの方が多くようで、その分豊富な知識を聞くと本気で感心したり喜んだりしてくれる。

そんなヴィヴィオの純粋な反応に気分が良くなったルシウスは、つい色々喋っていた。

ミッド式ベースのストライクアーツを使うヴィヴィオはルシウスのベルカ式ベースのストライクアーツに興味があるようだった。これらは使う魔法の系統が違うだけで、動きには共通した部分が多いのだ。

ふと気がつくと、随分と話し込んでいたようで、そろそろ帰って学校の支度をする時間が近づいていた。

「あれ、もうこんな時間だ。ヴィヴィオは練習中だったのに、引き留めちゃってごめんね」

その言葉を聞いたヴィヴィオはハッと気がついたような顔をする。と、気恥ずかしそうに笑って言った。

「いえいえ、大丈夫ですよ。ルシウスさんのお話、すつごく為になりましたから！ こちらこそ楽しくなっちゃって、ルシウスさんも練習があっただすよね」

ただその笑顔の中には少しばかりのぎこちなさや焦りが隠れている。気づかれまいとしているのか分かりにくい。ルシウスは初めに話しかけた時に見た笑顔を覚えていた。

「いや、俺の方は平気なだけ……」
ところで今日初めて話したのに不躰かもしれないし、話したくなかったら言わなくていいけど、ヴィヴィオ、何かあった？ 今日動きは今までよりもキ

レがなくて、それを見て気になって話しかけたんだけど……」

それを聞いたヴィヴィオは少しバツが悪そうな顔をした。

「ルシウスさんにはお見通しだったんですね。隠すような事でもないんですけど、昨日初めて会った方とのスパ―をやつて。ただわたしが真面目にやってない様に見えたみたいで、相手の人が怒つちやつたんです。わたしのストライクアーツが趣味と遊びだつて言われちゃつて……」

そう言うヴィヴィオはどこことなく寂しそうに見える。それと同時に少し怒っているような、見返してやろうという気概のような、力強さを感じた。

「そうか…… よし、分かった。明日から俺がヴィヴィオの相手するから。明日も同じ時間に」

「え!?! そ、そんな迷惑じゃないですか!?! わたしよりルシウスさんの方がずっと強いのに……」

「いや、迷惑なんかじゃないよ。俺としても相手が居てくれた方が練習になるし」

それを聞いたヴィヴィオは少し迷うような素振りを見せたが、やがておずおずと、

「お願い、してもいいですか?」

「ああ、もちろん」

「やったあ! ありがとうございます! すっごく、

すっごく嬉しいです!!」

こういう時ヴィヴィオは素直に喜んでくれる。これはヴィヴィオの魅力だとルシウスは思った。

ぴよんぴよん跳ねて嬉しそうにはしやぎ回るヴィヴィオはまるで初等科の生徒のような無邪気さだった。

翌日の朝から早速、二人の練習は始まった。

一人で行っていた練習に相手が出来ただけ。言ってしまうえばそれだけの事だが、ヴィヴィオは早速、思った以上の成果を実感していた。

「ハッ……!」 ハッ……! ハッ……!」

ヴィヴィオの鋭い呼気が朝の凜とした空気の中で響く。

初日である今は様子見の意味合いが強かった筈だが、存外お互いに熱くなっているのか、徐々に拳や足技の応酬が激しく、素早くなくなっている。

今まで覗き見たルシウスの練習風景からして分かっていたが、やっぱり全然ヴィヴィオの実力は追い付いていない。完全に教わるだけになっているヴィヴィオは申し訳なきを感じてしまうが、折角のルシウスの好意なのだ。最大限モノにしようとかかなりの集中力を発揮していた。

聡明なヴィヴィオは言われずともルシウスの訓練の目的に気がついている。

ヴィヴィオはまだ、基礎固めの段階にある。基礎の型を身体に覚え込ませて、どのような状況、どのような態勢からでもそれを適切に素早く繰り出せる様になること。それが格闘技の基礎にして目標だ。その為に毎朝早くに起きて型の練習を続けてきた。

ルシウスの訓練はその延長だった。

あえて隙を晒して、ヴィヴィオの攻撃を正しい綺麗な基礎の型で誘導する。少しでも態勢が崩れていたり、無理矢理な攻撃をしようものなら即座に対応されて、お仕置きだとはかりに強かに反撃される。そうやって一通りの型を実践的に固めて行くのだ。

初めはヴィヴィオが一度打ち込む毎に言葉で改善点の説明を受けていたが、次第にそれも減り、ヴィヴィオの型に改善点がある時には口で説明する時間も勿体ないとばかりにヴィヴィオが打ち出した型と同じ型で、ヴィヴィオの改善点を少し強調しつつそれを直す事でのような利点があるのか分かるように打ち込んでくる。それを受け取るヴィヴィオは口で説明されるよりもずっと型を直す事の利点を実感できて、意識に残りやすい。

そしてそれを意識して直した型でまた打ち込んでいく。

そうやってヴィヴィオの型は目に見えるように洗練されていった。

ー スゴイ！

スゴイ!!

スゴイ!!!

ヴィヴィオは興奮していた。自分が成長しているのが手に取るよ

うに感じられた。こんな経験は初めてだった。自分一人で型の練習をする時とは効率が比べ物にならないし、下手したらノーヴェとの訓練よりも自分の成長を実感できていた。

それはきつとヴィヴィオとルシウスの戦闘スタイルが似通っているのもあるが、それ以上にテンポがピッタリなのだ。なぜか、まるで産まれたときからの知り合いのように、息が合う。ルシウスが伝えた事が手に取るように分かる。こんな事初めての経験だった。

自分の成長を実感できる楽しさと、こんなに息が合う人と出会えたことへの嬉しさで、ヴィヴィオは今までにないくらい気分が高揚していた。この時間が永遠に続けば良いのにと本気で願った。

暫くしてインターバルとしてルシウスとの距離を取った時、ふとルシウスが構えを解いた。

「今日はここまでしておこう。今日のおさらいをしたら、そろそろいい時間だ」

「ふえ……？ あつ、もうこんな時間……」

どんなに楽しい時間にも終わりはある。

楽しかった時間は本当にあつという間で、二時間程の訓練もヴィヴィオにとっては十分くらいに感じられた。

ヴィヴィオはびっくりしてしまう。時計の故障を本気で疑った。それでも終わりの時間だと気がついて、ヴィヴィオは悲しくなってしまう。

そんな気持ち顔に出てしまったのか。ルシウスの苦笑する顔を見て、とたんに恥ずかしさで顔から火が出そうな気分になるヴィヴィオだった。

一通り本日練習したことについておさらいすると、そろそろ帰らなくてはいけない時間になる。

「そろそろ帰ろうか、もう時間だ」

その言葉にヴィヴィオは悲しみが再燃してしまう。

そんな彼女を見て、空気を変えるようにルシウスは言った。

「それにしてもヴィヴィオは凄いな。今朝の少しの時間でも成長しているのがよく分かった」

練習の時の感覚が戻ったのか、ヴィヴァイオはまた嬉しそうになる。「はい、ルシウスさんのお陰です！　わたし、こんなに思い通りに練習できるのって初めてで！　　凄く楽しかったです！」

ホントにありがとうございます!!」

そう言つてペコリと大きくお辞儀する。

「いや、こちらこそこんなに教えがいがあるのは初めてだったよ。正直驚きだった」

「えへへ。ありがとうございます。あの、また明日もお願いしていいですか？」

「もちろん。そういう約束だしな。俺も楽しかったし」

「やったっ！　　じゃあまた明日です。楽しみにしてますね！」

「ああ、また明日」

たたたつとヴィヴァイオは駆けていく。

その足取りは軽やかで、先程の悲しそうな雰囲気は少しも感じられなかった。

「えへへ。また明日だつて」

そんな独り言を呟いてしまうくらいに、ヴィヴァイオは浮かれていた。

早朝のボーイミーツガール2

ルシウスもヴィヴィオと同じく、不思議な感覚を味わっていた。ヴィヴィオの動きが手に取るように分かるし、何が出来なくてどこで躓いているのかも分かる。

呼吸などのリズムが合っているのだろうか、まるで長年連れ添った夫婦のように息が合う。

そんなヴィヴィオと過ごすこの朝の時間はルシウスにとって非常に居心地が良く、また、ヴィヴィオも自分と同じ気持ちを抱いているだろう事も容易く分かってしまうのだ。

ヴィヴィオはルシウスの教えを、砂漠に水を垂らしたように吸収して、モノにしていた。日増しに、否、分増しにとでも言うべき速度で成長していく。ヴィヴィオの型はより鋭く、より力強く進化しており、それに伴ってルシウスも訓練の難易度を上げ、晒す隙はより小さく短く、反撃はより鋭く、素早くしていた。ルシウスはヴィヴィオがどの程度までならば着いてこられるのかを見切っていた。

ただ、ヴィヴィオの試合までにある程度仕上げる事を目指している以上、初日を含めて七日間しか練習の時間を取れない。

三日目までは初日と同じくひたすら実践的に型を固める事に終始した。

四日目と五日目は後半は晒す隙をあえて増やし、その中でどこに打ち込むべきか、何が最適の型かを即座に選びとる訓練も平行した。当然その中で型が崩れたりすれば強かに反撃する。

そして六日目と七日目。

前半は五日目の後半までと同じ練習、後半は実戦を意識した試合形式とした。

七日目、AM5:10

ヴィヴィオが右拳を突き出す。

それに掌を合わせて受け止めると、右足で蹴りを叩き込む。

ヴィヴィオが左腕でガードするも、それを無視して押し込む。

よろめいたヴィヴィオに追撃しようと近寄ると、ヴィヴィオは咄嗟に右拳を放ってくる。

それを魔力付与した左腕で受け流すと、下方から鋭い蹴りが顎先を狙ってきた。

蛇のように良くしなり、予想外に伸びるその蹴撃を顔を反らしてかわすと、そのまま脹ら脛を右腕で抱え込み、地面に引き倒して顔面に体重を乗せた膝を叩き込む――一寸前でピタリと止めた。

「……まいりました」

ヴィヴィオはグデーと脱力して両手足を伸ばしつつ降参を宣言する。

拗ねたような声色だが、やはり格闘家としては悔しいのか、ルシウスをうらめしそうな目で見ている。

「よし。では、今回は何が悪かった？」

「……足を掴まれちゃったところ？」

「そうだな。では何故掴まれた？」

「顎を狙うのはダメだったよね……」

足を上げすぎないで身体

か脚を狙って、相手の体勢を崩すか、それ以前に押し込まれて体勢を崩されちゃったから無理に攻めないで仕切り直すべきでした」

「そうだな、それが分かっているなら良い。じゃあ、次だ」

「はい！」

ヴィヴィオにはかなりキツイ試合展開だが、ルシウスがそのように調整していた。

ヴィヴィオに試合相手の情報を聞いたルシウスは、成長するヴィヴィオに合わせて常に彼女よりも少し格上のハードヒッターになるよう演じて練習相手をつとめていたのだ。

それからしばらくの時間。二人の訓練は続き、ついに対アインハルト戦に向けたヴィヴィオの秘密特訓も終わりの時を迎える事になった。

ヴィヴィオは訓練所に備え付けのベンチに腰かけている。ここ一週間は訓練が終わった

ら、毎日ここに座ってルシウスとその日の訓練のおさらいをするの

だ。

ヴィヴィオにとってこの時間は、ルシウスとの時間の終わりを感じさせる寂しいものでありつつ、しかし彼とおしゃべりして段々と距離が縮まっている事を感じられる楽しい時間でもあった。

ただ、今日に限っては寂しさと、そして何よりそれに勝る不安でいっぱいだった。

「ほら、ご褒美だ」

「ひゃっ!？」

もう、ルシウスさん、冷たいです！

……あ

りがとうございます」

ルシウスがヴィヴィオの隣に座り、運動して火照ったヴィヴィオの頬っぺたにキンキンに冷えたドリンクの容器をピタツとつけた。冷たくてビックリしてしまう。悪戯されて少し頬を膨らませるヴィヴィオだが、しかし律儀にお礼を言う。こんなやりとり一つで浮かれてしまう自分にヴィヴィオは気づいていた。ルシウスが自販機で買ってきてくれたドリンク。これはヴィヴィオのお気に入りだ。訓練初日に彼に勧められて初めて飲んだのだが、とても美味しくてヴィヴィオは一口で気に入ってしまった。それ以来、訓練の後にはいつもルシウスが買ってきてくれる。ヴィヴィオも初めはお金を出そうとしたのだが、頑張ったご褒美だと言われてしまうと何だか嬉しくて、つい受け取ってしまう。流石に毎日続けばもうお金を出すとは言い出さないが、練習に付き合ってくれたお礼と一緒にいつか何かしらの形でお礼をしようとヴィヴィオは決意していた。

———そこまで考えて、またヴィヴィオの心に不安が甦ってきた。いつか。しかしいつかとはいつだろう。

ルシウスが訓練を付けてくれる約束は今日までだ。またここに来れば会えるとは思っているが、しかし会えないかもしれない。ルシウスとの繋がりは朝の訓練だけで、お互いに名前以外ほとんど相手の事を知らないのだ。いつものヴィヴィオはもつとグイグイ踏み込んで行けるのだが、流石に年上の男の人との関わりは殆ど無く、あってもユーノやエリオなど母の知り合いばかりで皆ヴィヴィオにとっても気を使ってくれる人ばかりなのだ。要するにヴィヴィオには男の人と

の距離の回り方がイマイチ分からなかった。それでプライベートな事柄に距離を詰めるのに怖じ気づいていた。そんな事ありえないと分かっているけれど、柄にもなく嫌われたくないと思ってしまうのかもしれない。

しかしそこまで自覚したヴィヴィオは思うのだ。こんなのは高町ヴィヴィオじゃない。なのはママの娘として、どうにかルシウスさんと――

「なあ」

「ふえ!? あ、何ですか、ルシウスさん」

ヴィヴィオの思考をルシウスの声が遮った。

「ふえ!? って、驚きすぎだろ」

「うーっ！ 考え事してたんです！

ルシウスさん？」

「今日で約束の一週間は終わりだな」

その言葉にヴィヴィオの心臓はドクンと大きくはねた。

先ほど吹っ切れたと思ったが、所詮は空元気。彼との繋がりが無くなってしまふ事を意識すると、やはり不安になってしまふのだ。

「はい」

「その、だな。えーっと、何て言えばいいかな……」

自分から切り出したのに妙に歯切れが悪い。

ヴィヴィオが繋がりが無くなることを不安に思っていたが、その実ルシウスも同じ気持ちだったのだ。

しかしルシウスは男としての意地で不安な気持ちを押し込める。

「まあ、あれだ。ヴィヴィオの訓練はまだ終わってない。まだまだ俺からすれば弱っちいままだし、教えられることは沢山あると思う。だから、また一緒にここで練習しないか？」

ヴィヴィオは驚いた。

ルシウスからの提案の内容よりも、彼の目が少し不安で揺れている。その事実には驚いたのだ。

そして気がついた。ルシウスもヴィヴィオと同じ気持ちであることに。

それに気がついてしまうと、ヴィヴィオの心はストーンと落ち着いた。何だか晴れ渡るような気持ちにすらなってくる。

「……そっか、ルシウスさんもわたしと同じなんだ。

あんなに強いルシウスが、わたしとの別れを不安に思っている。

それを考えると、なんだか楽しくて、嬉しくて、可笑しくなったヴィオは、少し笑ってしまっただくらいだ。

「えへへっ」

「……なんだよ」

笑われたと思ったルシウスは少しムスツとしている。

そんな顔を見ると、年上の男の人なのに、ヴィヴィオにはなんだか可愛く見えてきてしまった。

「いえいえ、なんでもないですよ。訓練、しましょう？」

これか

「私も一緒に！ わたし、もっとルシウスさんと訓練したいです！」

それを聞いたルシウスは安心したのか、

「そ、そうか。良かった。ヴィヴィオという時間は何だか安心できて、楽しくて、凄く心地良いからな」

「……………」

「……それは、反則だよ……」。

まさかの不意討ちにヴィヴィオはトマトみたいに真っ赤になって俯いてしまった。

それを見たルシウスも自分がなにを口に滑らせたかを理解して、少し恥ずかしくなってしまう。

口が勝手に動くんなんてルシウスには初めての経験だった。

「……………」

「……………」

暫くお互いに何も喋れない無言の時間が続く。

二人とも恥ずかしくて居たたまれないのか、そっぽを向くでもなくただ正面に顔を固定して顔は俯きぎみ、ソワソワと何度もドリンクに口を着けている。

朝の散歩なのか、側を通った妙齢の女性がそんな二人を微笑ましげ

に眺めて去っていった。

ようやく落ち着いたようで、二人とも顔色は元に戻ってきた。

二人ともポツポツと途切れるように会話を交わし始めている。

ルシウスなんかは、そこに流れるのんびりとした空気を楽しんではいるようだ。目を瞑って満足げな表情をしている。

暫くして、ルシウスはふと切り出した。

「……ヴィヴィオ、最後に話しておきたいことがある」

「……はい、なんででしょう？」

いつになく真剣な様子のルシウスに、ヴィヴィオは居住まいを正した。

「ヴィヴィオはなぜ格闘技ストライクアーツをやっている？」

「え？」

想定外の質問に、ヴィヴィオは少し虚を付かれた。

しかし、ヴィヴィオは誰に憚ることのない思いを持っている。

「守るため、です」

「何をだ？」

「ママを。昔いろいろあって、わたしはママを傷つけちゃった事があるんです。大好きなのに、言葉を届けられなくて、わたしの為にママは戦って、傷ついた。だから今度はわたしが守ります。ママを守れるくらいに強くなって、必ず」

真剣な表情でそこまで言ったヴィヴィオは、ふと苦笑して、

「でも今は純粹にストライクアーツが楽しいっていうのもあるんです。ストライクアーツを通じて、沢山の人と繋がれました。わたしの親友の一人とも格闘戦競技を通じて仲良くなったんです」

それに、とヴィヴィオは続ける。

そして照れ臭そうに逡巡するも、意を決したように、

「ストライクアーツのおかげで、ルシウスさんとも出会えましたから。だから、やっぱり私はストライクアーツが好きです」

にっこりと太陽のように、本当に嬉しそうに笑って、しかし恥ずかしそうに顔を赤らめながらそう言った。

次第に恥ずかしくなったのか、どんどん顔を真っ赤にして俯いてしまっているが。

そんなに恥ずかしいなら言わなければ良いものかと思いつつ、ルシウスも恥ずかしくなってしまう。

「……なに言ってるんだよ」

「えへへ、さっきルシウスさんが恥ずかしいこと言ったお返しです！」

「……そうかい」

確かに見事なカウンターパンチだった。流石はカウンターヒッター。

存分に悶えて堪能してラブコメしたい所だが、しかし今は他に伝えたいことがある。

否、伝えねばならぬ事がある。

少しの間でもルシウスの弟子として研鑽したならば、そしてこれからも自分に教えを請うのならば。

志を伝えなければならぬ。

これは義務なのだ。必ずしも自分の思いに賛同する必要はない。賛同してくればそれは光栄な事だが、考え方を強要するつもりもない。現にルシウスも師の志に共感はすれど、唯々諾々と従っている訳ではない。自分なりに解釈して、育んできた価値観と照らし合わせて、そして自然と導き出されたものが志とも言えるだろう。

力ある者には義務がある。自分を律する義務だ。力を持つものが皆が自分勝手に振る舞えば、社会は立ち行かなくなる。特に魔法という強大な力が個人に依存する世界では。人を殺すも生かすも本人次第、魔法という大きな力は容易く人を狂わせ得る。志を受け継がないまま力だけを持ってしまった者は悲惨だろう。自分で己を律する志を見いだせれば良いが、それは中々に難しい事だ。そういった者は往々にして犯罪者に身を落としていく。なればこそ、力を持つものはその力を振るう志を持たねばならないし、力を授けた者は志をも授ける義務がある。それは時代時代に合わせて古来から連綿と続いてきた先人の思いであり、誇りだ。

「……それでだな、強くなりたいとお前は言ったな？」

「はい」

「なら勝て。戦って思いを届けたいとか温い事は言うな。そんなものは勝って相手に分かせてやればいい。自分はお前より強いんだと。舐めくさった態度をとったことを地に這いつくばらせて後悔させてやれ。勝者は敗者の言葉なんて心に響かせない。耳で聞くだけだ。敗者が何を言っても所詮は負け犬の戯れ言だからだ」

「……」

ヴィヴィオには母を守るために強くなりたい、という立派な志があつた。これは己で見いだしたものだろう。これにひとまずルシウスは安堵した。ヴィヴィオはいたずらに力を振るう者ではないと分かつたからだ。

故に今回ルシウスが伝えるのは戦いに関する志、気概といったものだ。

ただしこれは覇者の志である。

それはヴィヴィオが今まで培ってきた価値観からは外れたものだった。

しかし不思議と心に響く。

そういえば。

なの^マのはもフエイト^マと仲良くなつたのは、戦いを通じてではなかつただろうか。八神家の人たちともそうだと聞いた事がある。どつちが勝つたとか負けたとかははっきりと聞いてはいないけれど、なの^マにも勝つて初めて伝えられた事があつたのだろうか？

考えにふけるヴィヴィオに、ルシウスは続ける。

「ヴィヴィオ、本気で勝とうとしない奴は強くなつてなれない。勝ちにこだわって、腕が折れたら足で、足が折れたら噛みついてでも勝ちを取れ。どんな手を使ってでも勝つという志を持つことが、強くなる為には不可欠だ」

「……！」

ヴィヴィオの中での強さの象徴はなの^マのはだ。

他にもヴィヴィオの周りには、強い人が沢山いる。彼女たちについて思いを馳せてみる。

なのはやフエイト、はやてといったストライカー級の魔導師は、最終防衛線だ。彼女たちが負ける事態になつては、他の魔導師には成す術はなくなり、多くの人命に関わる。

ティアナは凶悪犯罪者に特化した執務官。彼女の敗北は悪人を世に蔓延らせる。

スバルは人命救助の職に就いている。彼女の敗北は、そのまま他人の命を散らす。

他にも、ヴィヴィオの周りの「強い」人たちは皆が負けられない人たちだ。

それに思い至った時、ヴィヴィオの中の歯車が噛み合った感覚がした。

「今回は試合だから良いが、いつかヴィヴィオも戦わなくてはならない時が来るかもしれない。その時に勝てなければ、何かを失う事になる。弱者には何も守れない。だから、勝て。そして強くなれ。当然卑怯な手を使えという訳じゃない。正面から相手を打ち倒し、お前の本気を証明してやれ！」

「……はいー」

「……よし、いい返事だ」

ヴィヴィオの本気が窺える返事だった。志は引き継がれたと、ルシウスは安堵した。

安心からか、ヴィヴィオのどことなく幼い雰囲気からか、ルシウスはついヴィヴィオの頭を撫でてしまった。

それにビツクリして固まったヴィヴィオだが、やがておずおずと恥ずかしそうにルシウスの方に頭を差し出してくる。

ルシウスとしても引つ込める訳にはいかず、これはこれで良いかと暫くヴィヴィオの指通りの良い毛並みを堪能することにした。

しかしやがて、楽しい時間も終わる。

ルシウスは手を離して、ヴィヴィオに向き直った。

「……明日は来ないんだったよな？」

「……うん。ノーヴェ……わたしのコーチが朝から調整してくれるって」

「よかったな。ヴィヴィオはこの一週間で本当に強くなった。後はちゃんと万全にして、悔いの無いように戦えよ」

「はい、分かりました、師匠！　わたし、高町ヴィヴィオはルシウス師匠の弟子として恥じない戦いをするここに誓います！」

おどけた様に言うヴィヴィオ。

しかしその目は真剣だ。

「ああ、その意気だ。そろそろ行くか」

「はい。あの、一週間ほんつととうにありがとうございました！」

わたし、ルシウスさんと出会えて良かったです！　明後日

は結果の報告に必ずまた来ますから、楽しみにしててくださいね！」

「朗報を待ってる。じゃあな」

そう言つて二人は別れた。

暫く歩いた所で、ヴィヴィオはデバイスのクリスにホロウインドウを出してもらう。

そこには、ルシウス・マリウスという連絡先が。ついにできた彼の確たる繋がりには、ヴィヴィオは頬の弛みを押さえられそうになく、むずむずする気持ちを発散させるように家に向かって駆け出した。

はじめまして

ヴィヴィオとアインハルトの試合の時間が刻一刻と近づいている。ヴィヴィオは試合開場としてノーヴェヤやスバルが用意してくれた今回の試合会場であるアラル港湾埠頭の廃倉庫区画に居た。

ノーヴェに手伝ってもらい、ゆっくりと身体を伸ばしている。

考えるのはアインハルトの事。アインハルトは旧ベルカ王家の王族、霸王イングヴァルトの末裔らしい。霸王と言えば、ヴィヴィオでも知っているビツクネームだ。ベルカ争乱末期の頃、具体的にはゆりかごが飛んだ後に聖王連合の体制側として他国の鎮圧に貢献した王。その圧倒的な戦いぶりから、霸王と呼ばれて恐れられたとか。アインハルトはその純血統として力を受け継いでいるだろう上に、いかなる秘術か受け継いでしまった先祖の記憶に基づいて鍛練を積んでいるようだ。

その記憶が原因で生き急ぐように強さを追い求める生活をしているらしい。

確かに幼い頃から先祖の、それも血生臭い戦乱の記憶なんて物があれば歪んでしまうのも無理はない。

それを考えるのとアインハルトは随分とマトモに育ったのだろうし、同情する余地はあるだろう。

——でもそれとこれとは話しは別だよね。

確かにアインハルトは強い。ヴィヴィオよりも長い年月を格闘技に注いできたのは伊達ではない。

実際最初はヴィヴィオは今回の試合でアインハルトに、自分が^{ストライクアーツ}格闘技に本気で取り組んでいる気持ちをお届けられれば良いかと考えていた。ある種の諦めが先行していた。

しかしそれではダメなのだ。ルシウスに訓練を付けてもらって、話を聞いて、本気でヴィヴィオの相手をしてくれる彼を見て思ったのだ。

それはヴィヴィオを信じてアインハルトとの試合を託してくれた

ノーヴェにも、ヴィヴィオの勝利の為に特訓してくれたルシウスにも、そして戦ってくれるアインハルトにも失礼なことだと。

ノーヴェの、ルシウスの弟子として、高町なのはとフェイト・T・ハラオウンの娘として、そして一人の格闘家である高町ヴィヴィオとして負けられない。

やるからには、勝つ。

アインハルトは素直に凄いと思う。尊敬しよう。称賛もしよう。でも勝つ。

売られた喧嘩は高値で買おう。それが一格闘家としてのプライドだ。

もう二度と趣味と遊びだなんて言わせない。

ーーーーわたしをみくびつた事を後悔させてやるんだから！

この時がヴィヴィオに初めて明確な勝利への執念、必ずや相手を打ち倒すという気概が生まれた瞬間だった。

これがルシウスの話の影響を受けていないと言えは嘘だ。

しかしヴィヴィオはあの後に色々と考え抜いて、自分で出した答えなのだ。

すると、クリスがメールの受信を伝えてきた。どことなく誰から送られてきたのかを直感しつつ、メールを開く。

そこにはただ一言。

ーーーー勝て

ヴィヴィオは好戦的に頬をつり上げた。

試合開始の10分程前。

アインハルトが廃倉庫群に姿を表した。

「アインハルト・ストラトス、参りました」

するとヴィヴィオがアインハルトに深々と頭を下げる。

「来ていただいてありがとうございます、アインハルトさん」

そんなヴィヴィオを困ったように見るアインハルトだが、しかし次第に顔つきが変わっていく。

顔を上げたヴィヴィオの顔つきがこの間と全然違うのだ。確かに

以前と同じく試合を楽しむような雰囲気こそある。しかしその表情はほんの一週間前までは感じなかった貪欲に勝利を求める者、戦士の表情だとアインハルトの記憶が告げるのだ。いかなる心境の変化なのか、あるいはこれが彼女の本来の姿なのか……

何れにせよアインハルトには願ってもない事だ。

アインハルトの目標は未だ変わっていない。確かにノーヴェエ達に捕まってからは以前のように闇討ち紛いの決闘こそ仕掛けていないが、しかし古きベルカなどの王よりも霸王である己が強いことを証明するという思いに変わりはしない。かつて己が弱かったせいで大切な人を守れなかった後悔に苛まれ、なお苛烈に生き抜いた霸王の悲願。数百年もの間積み重ねられてきたその想いは未だ拭えてなどいない。

強さの証明をこそ目標にするアインハルトにとつて、誰よりもそれを証明したい相手の血を継ぐヴィヴィオがやる気になってくれるのは望ましい事だ。

しかし、だからこそ気は抜けない。

霸王の悲願を叶える為にも、彼女に負ける訳にはいかないのだ……そう決意を新たにしているアインハルトと今までになく好戦的に見えるヴィヴィオに軽く困惑したようなノーヴェエが、しかし気を取り直すように言葉を発した。

「ここな、救助隊の訓練でも使わせてもらってる場所なんだ。廃倉庫だし許可も取ってあるから安心して全力出していぞ。あと、やけにやる気みたいだからあらかじめ言っておくけど、危険だと思ったら止めに入るからな」

それを聞いたヴィヴィオは苦笑していた。

ノーヴェエは心配性だな、とか考えているようだ。しかしヴィヴィオにもいつになく熱くなっている自覚があるので、素直に頷いておく。

「わかったよ、ノーヴェエ。ありがとう」

「はい、異存ありません」

アインハルトも素直に頷いた所で、戦闘準備に入る。

成長した姿に変わったヴィヴィオに、アインハルトは少し驚いた。

オーオリヴィエにそっくりです。一部はオリヴィエよりもずつと

大きく成長しているようですが……

ヴィヴィオの胸元辺りを見て、オリヴィエが聞いたら無言で殴り飛ばされそうな事を考えつつ、アインハルトも姿を変える。

試合前でコンディションを整えてきたアインハルトは驚きを表に出したりしない。

「今回も魔法はナシの格闘オンリー、5分一本勝負。それじゃあ試合……開始ッ！」

戦闘が開始されても両者構えるだけで動かない。隙を伺っているのか、様子を見ているのか。しかしアインハルトに隙は見当たらず、堂々とした構えだ。ヴィヴィオはアインハルトの威圧感に少し怯む。

「……この間とは全然ちがう。凄い威圧感。一体どれくらいどんな風に鍛えてきたんだろう？」

しかし。

「……だからって負けるつもりはないんだけどねッ!!」

自分を鼓舞したヴィヴィオの真っ直ぐな拳がアインハルトに向かう!

アインハルトがハードヒッターである事はこの間のスパarringでも見たし、ノーヴェにも確認を取った。

そんな相手に殴り合いをするつもりはない。相手の土俵に乗ってあげるつもりはない。

狙うは一点のみ!

「ハッッ!!」

ヴィヴィオの拳を片腕で払い、自らの拳を突きだ出すアインハルト。

しかしヴィヴィオは体制を変えるだけでスルリと避け、アインハルトに反撃する。

「はあああッ！」

その拳はカウンターの要領で、アインハルトの胸元中央にヒットして、アインハルトを吹き飛ばした。

これは試合だ。倒れた相手への追撃は許されない。よってヴィ

ヴィオは息を整えつつ、手足を解している。

アインハルトも胸の痛みを堪えてのんびりと立ち上がりつつも、己が高揚しているのを感じていた。

「……なんて胆力ツ!!」

下手したら一撃でKOしかねない避け方だった。あんな事を出来るのは、異常者か、ハードヒッターとの戦いに慣れた者くらいだ。

しかしこれでヴィヴィオの戦闘スタイルも見えてきた。彼女はカウターヒッター、相手の動きを見切り、耐え凌ぎ、ここぞという所で叩き込む。しかもあのギリギリの避け方ならば通常よりも相手の隙を多く見いだせるだろう。アインハルトには少しやりにくい相手だ。

しかしそんな事は関係ない。今まで戦ってきた者の中にも似たような戦いをする者はいたし、そういった者たちを悉く倒してこそ霸王流の強さを証明できるのだ。

幸い咄嗟に胸元に魔力を多く回して、ダメージを軽減できた。一度見たからにはもう容易く食らってやるつもりはない。

「……ふう、失礼しました。貴女の事をまだ見誤っていたようです。もはや慢心はありません。貴女にはもはや霸王流に食われる未来、それしかありません」

「アインハルトさんも言いますね、カウター貫つておいてぬけぬけと。そういうのを何ですか、恥知らずっていうんでしたっけ?」

アインハルトの強気な言葉に、ヴィヴィオも口撃仕返した。

もしかしたら一週間前の件から少し鬱憤が溜まっているのかもしれない。

「……貴女には先輩に対する敬意が足りないようです。あの程度のカウターで調子に乗るなど、ここは一つ教育調教してあげるのが貴女の為でしょうか」

「あはは、いえいえ、結構ですよ。敗者に教わる事なんてありませんから」

「……………」

「……………」

ーードガンツツ!!

ビキビキと青筋を立てた二人の拳が合わさって、爆発するような音と共に、衝撃で地面が砕けて土煙が舞った。

土煙の中からは激しい音がなり続けている所からして、二人はまだ殴りあっているのだろう。

因みに先程のやり取りを聞いていたオーディエンスの面々は、ヴィオオらしからぬ台詞にドン引きしていた。

因みにノーヴェは色々と気に食わない事が多過ぎて、ブチブチと青筋を立てている。ルシウスとの特訓を知らないノーヴェには、ヴィオオの戦い方が危なっかしく見えて仕方がないのだ。

暫くすると土煙が晴れてきて、未だに殴り会う二人の姿が露になる。二人ともボロボロだ。一つ一つの傷はヴィオオの方が大きい。結果として二人のダメージは同じくらいのようなだ。

一週間前には手も足も出なかった相手にここまで奮戦するヴィオオに、観客の驚きは止まない。

断空拳を放つ隙がない……

アインハルトは決めきれなかった。彼女の文字通りの必殺技である断空拳さえ決まればヴィオオを落とせる確信があるのだが、いかんせんアインハルトの断空拳は隙が大きい。かつてベルカに覇を成した霸王イングヴァルトはノータイムで全ての攻撃を断空にしていたが、流石にアインハルトはまだその境地に達していない。

下手に断空拳を出してカウンターされれば、断空拳の威力が大きい分アインハルトも一撃で落とされる可能性があった。

しかしこのままだとマズイのも事実。やはり最初にモロに貰ったカウンターが痛手だった。今更になんて効いてきている。

しかしー

決定打が打てない……

一方でヴィオオも割と手詰まりだった。

ただでさえアインハルトの方が技量でも体力でも勝っているのだから、長期戦になつて辛いのはヴィオオも同じだ。

アインハルトに入れた最初の一撃が効いているようだが、それ以来警戒されているのか、大きな隙を見いだせない。

ヴィヴィオの弱点は自分から決めに行く決定打を持たない事だ。当然何れ克服するにせよ、現状無いものは仕方がない。もちろん思いつき殴るなり蹴るなりして上手く入れれば倒せるだろうが、そんなテレフォンパンチが通用する相手じゃない。

でも――

「勝つのはわたしだツツ！」

アインハルトは決めに行くつもりなのか、大きく力強い突撃チャージをした。今までにない速度だ。

そのまま殴りかかるも、ヴィヴィオに避けられることは分かっている。しかしヴィヴィオはいきなり変わったテンポに、体勢を崩した。

アインハルトはその瞬間、断空の構えを取り、それをうち放つ――

瞬間、ヴィヴィオの口元がほくそ笑むように歪んでいるのが見えた。

「――読まれたツツ！」

しかしもうアインハルトは止められない。

このまま行くしかない！

霸王 断空拳!!

その瞬間！

ヴィヴィオが断空拳の軌道を呼んで、カウンターを放ってくるのがアインハルトにはやけに鮮明に見えた。

「――このままでは負ける……」

負ける？

霸王たるこの私が？

こんな所で負けていて、私は再びベルカの天地に覇を成すことができるのか？

こんな所で負けていて、彼女を守ることができるのか？

「――否、断じて否ツ!!」

ここでオリヴィエの複製体ヴィヴィオに負けては、あの時の二の舞だ。

彼女の笑顔を曇らせることすらできないほどに頼りない
アインハルトのままだ。

「……だからこそ、私は負ける訳にはいかない!!
アインハルトは咄嗟に断空拳を中断した!

しかしその為に練り上げられた力は既にヴィヴィオに向けて放た
れている。

故に、中断された断空拳の力は行き場を失って、アインハルトの体
を爆発的な力で押し出した!

まさかのアインハルトの自爆特攻に驚いたヴィヴィオは、対応でき
ないままだ。

むしろカウンターを放つつもりで勢いを前に乗せてしまつてすら
いる。

そして爆発的な勢いのアインハルトとヴィヴィオはつい
に――

ゴチンツツ!!

額と額でぶつかり合った。

二人はもんどりうつてもつれ合いながら転って行き、ヴィヴィオの
背後にあつた廃倉庫にぶつかつて止まつた。

「ヴィヴィオツツ!」

「陛下ツツ!」

凄まじい勢いですつ飛んで行つた二人に、周囲は大慌てで駆け寄つ
ていく。

ヴィヴィオもアインハルトも子供の姿に戻っている。

気を失つて目を回しているヴィヴィオに重なるように倒れていた
妙に顔が赤いアインハルトがよろよろと立ち上がろうとして、駆け
寄つたティアナに肩を押さえられて、膝の上に寝転がされる。所謂膝
枕の体制だ。

因みにヴィヴィオもデイドに膝枕されている。特に大きな怪我
は無いようだ。

「貴女もフラフラなんだから、じつとしてなさい」

「はい、ありがとうございます……」

実際アインハルトも限界だ。大人しくティアナの言葉に甘えざるを得ない。

「まったく……無茶苦茶しやがって」

ノーヴェエが怒りを通り越して呆れたように言う。

スバルがそれを宥めている。

「でもほら、二人とも怪我は無かったんだし……」

「そういう問題じゃねえ！」

「そうだよねえ……」

しかし直ぐに折れた。スバルにも二人の戦いは危なっかしく見えていた。

「アインハルト！」

お前ヴィヴィオが起きたら一緒に説教だからな！」

「……はい」

アインハルトとしても最後の突進は危なかった自覚があるので何も言えない。

そんなアインハルトを見て反省していると受け取ったのか、ティアナが取り成してくれた。

「まあそれはもう少し落ち着いてからにきなさい。アインハルトもフラフラなんだから」

「……ああ、分かったよ。アインハルトも少し休んどけ。ティアナの膝枕なんて滅多にないぞ？」

「ちよつと！　　ノーヴェツ！」

そんな声を聞きながら、アインハルトは意識を落として行った。

アインハルトをオットーに任せて、少し場所を離れたティアナとノーヴェエは顔を見合わせてため息をつく。

「で、あれはどうなったんのよ？」

ヴィヴィオってあんなに勝ちに拘る子じゃ無かったと思うんだけど」

「ああ、それは私も気になってた」

「何か心当たりは無いの？」

「……正直、一週間前はあそこまでじゃ無かった、と思う。だとすると一週間前のアインハルトの態度に腹が立ってつてのも考えられなくはないけど、ヴィヴィオがなあ……」

「そうよね……まあ勝ちたいって気持ちは悪いものじゃないとは思いますが。私も人の事は言えないしむしろ二人には共感できるんだけどね」

六課時代のティアナは今よりずっとヤンチャだった。

それは今のアインハルトやヴィヴィオに通じるものがある。

「まあな……ただ問題なのは、ヴィヴィオが明らかにハードヒッターと戦い馴れていた事なんだよな……どこで覚えてきたんだか」

ティアナはそれを受けて、少し考えるそぶりをとる。

「……ヴィヴィオの友達のリオって子は？　　確かあの子もハードヒッターに近いでしょ？」

ヴィヴィオは聖王教会の最重要人物だ。そんなヴィヴィオに近しい人間は聖王教会でも管理局でも調べあげている。ティアナはヴィヴィオに個人的に近い人間として、それを確認する機会があった。「……いや、それはないな。言っちゃ何だが、リオじやまだアインハルト役としては役者不足だ。冷静に考えると、ヴィヴィオのアレは格上のハードヒッターに慣らした動きだ」

八神家のザフィーラ等の可能性もあるが、彼が稽古を付けていたなら例えヴィヴィオが秘密にして欲しいと言っていたとしても、余程の理由がない限りなのには連絡が行くだろう。子供に見えない所での大人同士のやりとりなんて、そんなものだ。

「要するにヴィヴィオに知らない誰かが稽古を付けたって事ね？」

「可能性、だな」

ザフィーラが稽古を付けていて、それをティアナやノーヴェエが知らないだけならば良い。

しかし、誰も知らない人間がヴィヴィオに近づいていたら問題だ。

ヴィヴィオの周りで何か問題が起きるなど、あつてはならない事だ。もし何か事が起きては、責任問題に発展する。

なのはが親になる事だけでも聖王教会にかなりの無理を通して
いるのだ。しかしヴィヴィオがなのはに懐いている事と、なのはや後見
人のフェイトの実力を勘案して、いざという時に盾になる（もちろん
比喩的な意味で）という条件でどうにか認めさせる事ができた。その
裏でははやてやカリムなどが相当尽力している。

だからもしもヴィヴィオの身に何かあれば、流石のはやてやカリム
でも庇いきれないだろう。最悪なのはとヴィヴィオが引き離される
恐れすらある。

「……はあ。なのはさんに何て言えばいいのよ。貴女の娘さんに悪い
虫が付いてます、って?」

「……可能性、だから」

気休めのようなノーヴェの言葉など耳に入らない。後でなのはに
会いに行く事を考えて、憂鬱になるティアナとノーヴェだった。

戻ってきたティアナがオットーに礼を言って、アインハルトを受け
取る。律儀な事に、また膝枕をして。ティアナはどことなく昔の彼女
に似ているアインハルトを思いの外可愛がっているようだとスバル
は感じて微笑ましくなる。怒鳴られるだろうから口には出さないが。
暫くすると、アインハルトが起き出してきた。休んだことで、大分
回復したようで、少しフラついてはいるが自分で立ち上がり、まだ眠っ
ているヴィヴィオの側に近づいた。

それを見てノーヴェが問いかける。

「で、ヴィヴィオはどうだった?」

するとアインハルトはどこかバツが悪そうに、

「彼女には謝らないといけません。先週は失礼な事を言っしまいました
したー訂正します、と」

「そうしてやってくれ、きつと喜ぶ」

アインハルトはヴィヴィオの寝顔を見て思う。

彼女は霸王^{わたし}の期待に応えてくれた。

そして、アインハルトも、また彼女と戦えたらと思っている。

正直、あんなにワクワクする試合はアインハルトにとって生まれて

初めてだった。

アインハルトはつい眠るヴィヴィオに近づいて、その小さな手を取る。

「はじめまして……ヴィヴィオさん。アインハルト・ストラトスです」

「知ってますー！」

いきなり目を見開いたヴィヴィオがガバツと上体を起こして放った言葉。あまりにもいきなりな事に、アインハルトは目を見開いて口をパクパクさせている。

どうやらヴィヴィオは試合を通してアインハルトを好敵手ライバルのような存在として意識したらしい。確かにライバルにへりくだる奴はいない。

するとヴィヴィオはニヤニヤし始めた。

「どうしましたか、アインハルトさん。自暴自棄の自爆特攻で頭打っておかしくなっちゃったんですか？」

「な、な、な………」

アインハルトは言葉も出ない。ただ顔を真っ赤にしている。

「それにしても、アインハルト・ストラトスです、なんて。知ってますよ、そんな事。あれ、これはチキン脳のアインハルトさんの為にわたしも名乗った方がいい場面ですか？」

高町ヴィヴィオです。

これでいいですか？」

次第にアインハルトにも試合の時の感覚が戻ってきた。こいつは敵だ。必ず、この舐めくさった後輩を躰てやる必要がある。

「何を偉そうな事を言ってるんですか、敗者のくせに。負け犬が何を言っても遠吠えにしかありません。敗者は隅っこでウジウジと縮こまっていればいいんです」

「まけてませんー！　アインハルトさんが自爆特攻してこなければ勝ってたのはわたしですー！」

それにどうせ直ぐには起

き上がれなかつたんでしょ？

なら試合のルールに照らせば

引き分けですよ、ひきわけ！」

「勝負の世界にたればを持ち込むとは、とんだ甘ちゃんですね。この試合は私の勝利、まあどんなに甘く見積もっても引き分けでしょう。そしてヴィヴィオさんの戦法は見抜きました。これから先、私とヴィヴィオさんの間で試合があるとすれば、あなたに勝ちの目はありません！」

「それはありません。次にアインハルトさんに自爆特攻されても避ける自信がありますから。自爆特攻とテレフォンパンチしか能のないアインハルトさんに負ける道理がありませんね！」

「ぐぬぬッ！」

睨み合うヴィヴィオとアインハルト。

リオとコロナ、元ナンバーズは見たことのないヴィヴィオの罵詈雑言に唾然としていた。

ノーヴェは頭が痛そうに額を押さえ、ティアナはどことなくニヤニヤしている。スバルはヴィヴィオの年相応とも言える態度に微笑ましそうにしていた。

するとヴィヴィオがニヤついた表情をした。何か良からぬ事を企む表情だ。しかしどことなく顔が赤らんでいることに、ティアナとスバルだけが気付いた。

「そういえばアインハルトさん、わたしアインハルトさんの自爆特攻のせいで立ち上がれないんです。どこか休める場所まで連れて行ってください」

「は、はあ!?! どうして私が……」

「アインハルトさんのせいなんですから、当たり前じゃないですか！」

責任取ってくださいよ、責任！」

「……いいいでしょう。敗者に手を差し伸ばすのも勝者の務めです。さあ、どうぞ」

「はい、よろしく願します」

そう言っアインハルトの胸元に手を回して、ヴィヴィオはキュッと抱きついた。

アインハルトのうなじ辺りに埋められたヴィヴィオの顔が嬉しうに緩んでいる事を知る者はいない。

ヴィヴィオを背負って一行の先頭を歩き始めたアインハルトはふと、自分の唇に指をやる。

「責任、ですか。始めてだったのですが……私にも責任、取ってくれるんでしようか？」

「何か言いましたかー？」

「いえ、何でもありません」

試合の終わりに吹き飛んだ際に触れ合った唇の感触を思い出し、アインハルトの顔が真っ赤になっているのに気がついた者は誰もいなかった。

娘の事情

本日は命よりも大切な娘のヴィヴィオが朝から試合の為に調整すると張り切っていた。友達になりたい子との試合というのになんとか黒歴史を発掘されるようなむず痒さを感じたりはしたものの、そういう展開が大好きなのはからずれば応援できるものだった。ヴィヴィオと自分との親子の絆みたいな物を感じられて、嬉しかったというのもある。

昨日の夜は豚カツを揚げて、今朝の朝食は試合当日の朝食を色々調べて炭水化物を中心に、脂質やたんぱく質、食物繊維は少な目の食事を朝早くに起きて作った。また、試合前後に適したスペシャルドリンクを対戦相手の子の分も作って持たせておいたりなど、母という立場からできうる限りの支援をしたつもりだ。

流石に仕事があつたので応援しに行く事は出来なかったが、何かある度に母が顔を出すのも自立という観点から良くないだろうし、元部下たちがいてもしもの事は無いだろうと信頼していた。当然、勝って帰っても負けて帰っても最大限のフォローをして、自分の過去の経験からアドバイスをするつもりでもいる。端的に言うとは諦めずに全力全開！ という内容である。

要するになのは娘に新しい友人ができることを最大限に応援していたのだ。その様子を見てなのは親子愛を疑う者はいないだろう。

しかして、仕事を終えたのは娘を家に送り届けてくれるというノーヴェの分も含めていつもより豪華な晩ごはんと食後のスペシャルデザートを作っていた。頑張ってきただろう娘を全力全開で労う為に。

夕飯を作っている途中でふと玄関が騒がしくなった。ヴィヴィオとノーヴェが帰ってきたのだろう。

パパパタとスリッパの音をたてて玄関まで出迎えると、非常に上機嫌な様子の娘と疲れきったようなノーヴェがいた。

ノーヴェの様子に何かあったのかな、と不思議に思いつつも丁寧に出迎える。

「お帰りー、ヴィヴィオ。ノーヴェもご苦労様、今日はありがとね。試合、どうだった？」

「ただいまー、ママ！　　試合はヴィヴィオが勝ったよ！」

「お疲れさまです、なのはさん。ヴィヴィオ、適当なこと言うな。試合は引き分けてって事で話しはまとまっただろ……」

「ヴィヴィオはあれを引き分けとは認めないのです。ヴィヴィオの反則勝ちですね」

「勘弁してくれ……」

なんだか良くわからないけど、ノーヴェが疲れきっている事だけは分かった。

とりあえず詳しい事はご飯の時に聞くことにする。

「そ、そうなんだー。何れにせよお疲れさま、ヴィヴィオ、ノーヴェ。お風呂湧いてるから入ってきたら？」

「うん！　　一緒に入る、ノーヴェ！」

「ああ、そうだな……お風呂お借りします、なのはさん」

ルンルンと風呂場に向かうヴィヴィオ。

先に行ったヴィヴィオを見送ったノーヴェが、疲れきった顔でなのはの方を見た。

「あの、なのはさん。最近ヴィヴィオって誰かに格闘技を教わったりしてました？」

「え？　　うーん、そんな事は無かったと思うけど……」

「そうですね……なのはさん、今日はヴィヴィオは早く寝ると思うので、その後に少しお時間いいですか？　　お話ししたいことがありまして……」

「え、うん、いいけど……それなら泊まっていきなよ。ノーヴェ、疲れてるみたいだし」

「ありがとうございます、お言葉に甘えます」

丁寧な頭を下げてから、ノーヴェもとぼとぼヴィヴィオの後を追った。

なにやらブツブツと呟いていたようだけれど、「ティアナ……じゃん負け……アインハルトとられた」としか聞き取れず、よく分からなかったなのは気にしないことに決めた。

ちようど二人がお風呂から上がった頃、夕飯が完成した。

お風呂に入って幾らか疲れが取れたのか、ノーヴェも先ほどよりは元気そうだ。同時に死地に向かう戦士のような覚悟を決めた目をしている気がしたけれど、なのははきつと気のせいだ思うことにした。

三人でなのは渾身の手料理に舌鼓を打ちつつ、楽しそうに語るヴィオオの話聞く。

「へえ……つまり、ヴィオオより歳上の子と引き分けたんだ！」

「すごいね、ヴィオオ。よく頑張ったね。お疲れさま！」

「うん、まあママまで引き分けて言うならそれでいいけど……ありがと、ママ」

正直、ヴィオオは引き分けという結果に納得していたが、素直に認めるのが癪だっただけなのだ。なのはに言われたならば否定はしない。

「それで、そのアインハルトちゃんとは友達になれた？」

「うーん、あれは友達なのでしょうか……」

「んー？　　そっか。良かったね、ヴィオオ」

ヴィオオは濁すような事を言っているけれど、なのはは先ほどまでの会話と娘の表情から何となく事情を察した。ずいぶんと愉快な事になっていそうな気がしたが、悪いものでは無いだろうという確信はある。出会った当時のわたしとヴィータちゃんみたいな感じかな、と勝手に納得しておく。

三人での楽しい夕飯も終わり、なのはのスペシャルデザートも綺麗に平らげると、じきにヴィオオが眠そうになっていたので歯を磨かせて部屋に行かせた。随分と早い時間だが、やはり疲れたのだろう。子供が寝たら、大人の時間。コーヒーを淹れて、ソファテーブルに置く。豆をミルで挽いて淹れたコーヒーはとてもいい香りで、リラックスできた。照明を少し落として、落ち着いて話をできる空間にする。

なのははこの様に舞台を整えるのを好む傾向にあった。

お互いに対面のソファに腰かけて、コーヒーを一口。ノーヴェが少し幸せそうな顔をしたのを見て、なのはも嬉しくなる。なのはは人をもてなすのが好きなのだ。

「このコーヒーすごく美味しいですね」

「ふふん、そうでしょ。伊達に喫茶店の娘じゃないからね……それで、話ってどうしたの？」

きつとヴィヴィオの事だよね」
どことなく言い難そうなノーヴェに助け船を出す形で話を振った。
するとノーヴェは居住まいを正して、少し真剣な表情をする。

「はい……率直に言いますと、ヴィヴィオが私たちの知らない誰かと定期的に会っている可能性があります」

その内容の重さに途端になのはも真剣な表情になった。ならざるを得なかった。

「……詳しく教えてくれる？」

そこでノーヴェはデバイスのジェットエッジを取りだし、アインハルトとヴィヴィオの試合の映像をレイジングハートに送らせた。

自分やティアナの私見が混じった考えを言うよりも、まずは前提として事実を確認した方が良いと考えたのだ。

「……」

映像を見終えたなのは、再び巻き戻して最初から再生する。それを三度ほど繰り返すと黙り込んでしまった。ノーヴェは静かにコーヒーを飲んで、なのはが考えを纏めるのを待つ。

「……なるほど。まずノーヴェがどう思ったのか聞かせてもらえる？」

私は近接格闘は専門じゃないから」

「はい。まず前提として、一週間前はヴィヴィオはこの動きはできませんでした。それは私が断言します。すると、ヴィヴィオは一週間でこの動きを身に付けた事になる。型が綺麗に洗練されているのと、鋭いカウンターはまだ納得できません。かなり厳しいですが、一人で身につける事ができない訳ではありません。正直たった一週間では私がコーチしてもここまでに仕上げる自信はありませんが」

「わかった。続けて？」

「はい。しかし、回避だけは別です。ヴィヴィオの動きはアインハルトの様なハードヒッターに慣らした動きです。特に、自分より少し格上の相手の」

「うん、それで?」

「今日のヴィヴィオはアインハルトの動きをほぼ見切っていました。アインハルトの攻撃のスピード、何処に打ち込んでくるのか、どれくらいの威力なのかを全て。確かにヴィヴィオは目が良いし、カウンターヒッターに向いていると思いますが、それにも限度があります。これは初見でできる動きではなく、何十何百と似たような動きを見て、自分の身で受けて、練習を積んで、始めてできる動きです」

「……そうだね」

「そこで問題になるのは、ヴィヴィオが誰に習ったのか。ここからは殆どティアナの考えなのですが、その相手……仮にXと呼称します……はかなり器用で高い格闘技の腕を持つ歳上の誰か。恐らくは男性の騎士ではないかと」

「ティアナが……」

なのはティアナの名前を聞いて、ほぼそれが真実であるだろうと確信した。ティアナはかなり頭がキレる。特に今回はプロファイリングの要素が強い。それこそティアナの専門分野であり、その能力でなのはティアナに遠く及ばないだろう事を自覚している。

「格闘技の腕に関しては、ヴィヴィオの上達から分かります。ヴィヴィオは対ハードヒッターにかなり習熟していましたが、そこまで仕上げするには常にヴィヴィオよりも少し格上のハードヒッターを演じ続けなければなりません。凄まじいスピードで成長するヴィヴィオに合わせて、です」

「つまり、Xにはそれができる技量があった」

「はい。そして、恐らくXはハードヒッターではありません。ハードヒッターは基本的にそこまで器用な者は少ないです。訓練で重点を置く場所が違いますから。よってXは格闘技者としてテクニカルなタイプですが、同時にハードヒッターを演じられる程度の力強さがある可能性が高い」

「だから、恐らく男性だと」

「はい」

確かに魔法を用いれば力を増幅できるし、女性にも才能があつて男顔負けの力を発揮する人もいる。しかし魔法での増幅も結局は元々の力との掛け算であり、やはり元の力が大きい男性の方が力が強くなる傾向にある。そしてヴィヴィオは幼いながらに身体強化した際の力はなかなか大きい。ヴィヴィオの弱点は攻撃の出力がイマイちな事だが、それは比較する対象の基準が高すぎるだけだ。そんなヴィヴィオに腕前や力を調整して教えるとなると、そこいらの女性では例えテクニカルなタイプでも容易ではない。ただ格上のハードヒッターを演じるというだけでなく、かなりの速度で成長するヴィヴィオに合わせて腕前を調整できるからには、それだけヴィヴィオと力が離れていたと考えられるからだ。しかし女性にも容易では無いだけで不可能ではないので、「恐らく」と頭に付けているのだろう。少なくともノーヴェは自分には出来ないと感じたが。

「他にも色々と言った根拠があつたようですが、私には理解できませんでした」

「それは仕方ないよ。きっと私が聞いても分からないから」

「そこまで言つて、なのはコーヒーをゆつくりと一口飲む。ノーヴェから聞いた話を頭の中で纏めているのだろう。」

「それで、騎士つていうのは？」

「真正古代^{エンシェント}ベルカの動きと近代ベルカやミッド式の動きは違います。アインハルトは純粹な古代ベルカの術者です。それをヴィヴィオが見切つていたということは、Xは古代ベルカの動きでヴィヴィオに訓練を付けて慣れさせていた」

「うん、それで騎士ね。私も同じ意見かな。ノーヴェの話には納得できまし。でも……これはちよつとマズイかな」

「そうですね……」

ヴィヴィオの立場は非常に不安定で危険だ。当然だろう。非合法に作られたクローンというだけでも難しい立場なのに、ヴィヴィオの場合は大規模事件の当事者になつた過去があり、その上宗教まで絡ん

でいるのだ。そんなヴィヴィオに近づく見知らぬ人物、しかもそれが歳上の男の可能性が高いとあつては、親としても友人としても落ち着かない。ヴィヴィオはまだ幼いながらに理的で分別がつくが、まだ子供だ。当然二人にとっては庇護すべき対象である。

「それに、例えその人がヴィヴィオに何かする気がなくても、騎士つていうのはマズイかもしれないかな」

「そうなんですか？」

ノーヴェにはこの理由は分からなかった。

「うん。聖王教会も一枚岩つて訳じゃないから……」

「……なるほど、派閥とかがあるわけですね」

聖王教会も一枚岩ではない。

今はグラフィア家を初めとしたヴィヴィオに好意的な派閥が後見して守ってくれているが、その派閥が全員カリムのように無条件で支援してくれている訳ではない。むしろヴィヴィオを守ることと利益があるからこそ守ってくれている者の方が多い。

もし人物Xが聖王教会の人間で、しかしカリムの所属する派閥の人間でなかったら、Xにそのつもりが有ろうと無かろうとカリムの所属する派閥に対する裏切りと受け取られる可能性がある。今はJS事件の直後よりかはヴィヴィオを取り巻く状況は落ち着いてきているが、ヴィヴィオの立場が難しい事には変わりはないのだ。少しでも不安要素は無いに越したことはない。ただでさえ若いなのは親としての能力が疑われる事はあつてはならないのだ。これからもヴィヴィオのお母さんであり続ける為にも。

こういつた旨の内容をなのは語った。ヴィヴィオと親しいノーヴェにも知っておいてもらった方が良いと考えて。

「ひとまず後でフェイトちゃんにも連絡取つて相談してみるよ。教えてくれてありがとう、ノーヴェ」

「いえ、杞憂だったら良いのですが……」

なのはは願う。せめて人物Xがヴィヴィオを取り巻くしがらみ以外の人物であつてほしいと。実際その可能性は十分にある。しかしなのはは母として、常に最善を尽くし最悪に備えなければならないの

だ。なのはにしても大人の事情で大切な娘の人間関係まで束縛なんてしたくはない。けれどこれは必要な事なのだと言えそうになる自分を奮い立たせていた。

「……………え？」

扉の向こう側、暗い廊下に細かく震える小さな影があった。

親子のかたち

『ありがとうございました。さようなら。ごめんなさい』

ヴィヴィオから来た最初で最後のメールだった。

ルシウス・マリウスは疲れきっていた。

自分の気持ちに整理がつけられないのは始めてだった。

別に何てことはないはずだ、ただ朝にちよつと訓練を付けてやってた奴との縁が切れただけ。

何度自分にそう言い聞かせても、あの無邪気な笑顔が脳裏を過る。

ヴィヴィオの試合の日から早一週間ほど。ルシウスは今までのように毎朝公園に来ている。以前までは心地よかった静かな空気も、今ではただ空虚なだけ。心にあつた何か大切なものが抜け落ちてしまったような感覚だ。こんな身勝手ばかりしやがって、次見かけたらとつちめてやる、とか考えようとして、それが空元気でしかない事に自分でも気がついていた。

少しでも思考に空きが出ると、あの太陽のような少女の事ばかり考えてしまう。何かあつたのだろうか、と。否、考えようとしてそこで思考が止まるのだ。ヴィヴィオの事を何も知らない自分に気がついて。彼女の事情を考えるだけの要素を殆ど持っていない。

ヴィヴィオとの時間はひたすら心地よかった。けれど、その心地良い時間に浸るばかりで踏み込んだ話を殆どしてこなかった。別にそういう話題を避けてきた訳ではない。けれど、その必要が無いと思ってしまうていたのだ。あの時間がずっと続くものと勝手に思い込んで。ヴィヴィオも同じ気持ちだろうと高をくくって。思えば、アドレスの交換もヴィヴィオから言い出したことだ。もしかしたら彼女は、自分との距離を詰めようとしてくれていたのかも知れない。

まさかいきなり何の理由もなく連絡を断つような子ではないと分

かっている。

何か事情があったのだろう。しかしその事情にまるで見当が付かない。ヴィヴィオの周りで何か起きたのだろう事だけしか分かることはない。

「どうしろってんだよ……」

そんな弱気な言葉を吐いた自分に苦笑する。

随分と参ってしまったているようだ。

ルシウスは近頃、学校の後にストライクアーツの練習ができる施設や高等科の学校をいくつか回っている。少しでも何かしないと落ち着かなかったのだ。

しかし、結局有力な情報は得られていない。

何か困ったことになっていないか。そうならば師匠として自分に行えることはないのか。そんなことばかり考えてしまうのだ。

もう認めざるを得ないだろう。

ルシウスにとってヴィヴィオは、思いの外大きな存在になっていたのだと。

ヴィヴィオがそれを望んで居なかったとしても、このままずっと会わないまままで終わるのが最善だとはルシウスには思えなかった。

聞きたい事がある。確かめたいことがある。会わなければ分からない事は沢山あるのだ。

例えば、自分の気持ちとか。



「どうしよう、フェイトちゃん、どうしたらいいの?」

「落ち着いて、なのは。何があったの?」

「分からないの!」

「へ?」

「ヴィヴィオが、ヴィヴィオがつ!」

「な、なのはっ!？」

そんな連絡を受け取ったのが約一週間前のこと。フェイトは通常は三週間はかかる仕事を急ピッチで仕上げた。

車を飛ばして家に着いた頃には、辺りはすっかり暗くなってきた。

フェイトは逸る気持ちを押さえて、玄関扉の前で一度深呼吸をした。なのはからの連絡は要領を得ていなくて、なのはにも何が何だか分かっていないことが伺えた。ただヴィヴィオに関する事で何かがあったのだろう事だけが分かる。そんな時に自分まで慌てていては分かるものも分からない。フェイトは執務官としての経験から、そう学んでいた。

家の扉を開けると、夕飯のいい匂いが。

普段の夕食より少し遅い時間だけれど、待っていてくれたみたいだ。

「ただいま、なのは、ヴィヴィオ」

「お、お帰りなさい、フェイトちゃん」

「……おかえり、フェイトママ」

リビングの扉を開けると、大好きな二人の顔が。すぐるような目のなのはと、ニコニコ笑うヴィヴィオ。

「……ああ、これはなのはには無理かな。」

フェイトは一目で何となく事情を理解した。

フェイトが帰ってすぐ夕飯の時間となった。フェイトは寝食を潰して仕事をしてきたので、正直お腹が空いていて、なのはの温かいご飯は嬉しい。今日のご飯はなのはの得意なハンバーグ。しかしお肉の質が何時もよりワンランク上だったり、付け合わせが多かったり、汁物の具がいつもより豪華だったり、デザートが手の込んだ物だったりした。

なのはの不器用だけれど細やかな努力を感じて、フェイトは微笑ま

しくなる。

「ね、ねえヴィヴィオ。今日は学校どうだったの？」

「楽しかったよー、なのはママ」

「っ！」

ニコニコ笑うヴィヴィオを見て、なのはが目を伏せる。

しかし直ぐに気を取り直すように、

「そ、そうなんだ！」

今日はどんな事を習ったのかな？」

「うーん、まずはねえ……」

ニコニコしながら学校での出来事を語っていくヴィヴィオ。なのははその話を聞いて辛そうな表情をしているが、それを表に出すまいと必死に堪えてもいる。普段のヴィヴィオならそんなのはの様子に気がつくはずだけれど、今は気づいていないようだ。

「……きつと自分の事でいっぱいなんだ。」

そんなヴィヴィオとなのはのどこかぎこちない会話は食後のデザートの間もずっと続いていた。

フェイトはお腹が空いていたので、二人の様子を観察しつつ、もぐもぐと平らげていた。

食事を終えて、今度はお風呂の時間。

フェイトはヴィヴィオをお風呂に誘う。

「ヴィヴィオ、一緒に入ろうか」

「うん、フェイトママ」

「あ、じゃあ私も……」

「なのは」

「ん？ フェイトちゃん？」

不思議そうなのはに、念話で伝える。

『なのはは今日は待ってて』

『え？』

『いいから』

「なのはは今日やることあったよね。だからヴィヴィオと先に入っちゃうね」

「う、うん……」

寂しそうななのはの表情を見て、後でこっちのフォローも必要かな、と苦笑いしたフェイトだった。

「……」

「……」

風呂ではヴィヴィオとは特に会話らしい会話は無かった。

その分頭と体をしっかり洗ってあげて、一緒に湯船に浸かる。

ただ、自分の温もりを伝えようと、貴女の味方はここにいるよと、その思いを伝えるようにフェイトはヴィヴィオの華奢な体をギュツと抱き締めた。

「……ねえ、くるしいよ、フェイトママ」

「うん」

「……くるしいよ」

「そっか」

「……」

「大好きだよ、ヴィヴィオ」

「……」

「大好きだよ」

ヴィヴィオも無言でキュツと抱き締め返してきた。

フェイトの胸に埋めたヴィヴィオの顔はフェイトには見えなかった。けれど、胸から離れたヴィヴィオの顔は、もう笑ってはいなかった。

夕飯が遅かったので、風呂を終えるともういい時間だ。

ヴィヴィオを部屋に上がらせると、なのはに向かい合う。

「なのは」

「フェイトちゃん……」

なのはは泣きそうだ。

しかし今はヴィヴィオが優先。なのはは大人でヴィヴィオは子供。フェイトは優先順位を間違えない大人だ。

「なのは、今日は待ってて」

「でも……」

「いいから」

「……………」

なのはは無言の涙目で上目遣いをする。

「……………っ……………いいから」

「……………うん」

対フェイト必殺技でも動じないフェイトに、なのははついに諦めた。

実際フェイトは心の中でかなり葛藤しているが。

「フェイトちゃん、ヴィヴィオのこと、お願いね？」

「うん、任せて、なのは」

さてここからが正念場だと気合いを入れ直したフェイトは、ヴィオの部屋をノックする。

「ヴィヴィオ、入っていいかな？」

「……………」

すこし間をおいて、静かにヴィヴィオの部屋の扉が開いた。うつむいたヴィヴィオの顔は伺えないが、何となく想像はつく。

「ヴィヴィオ、今日はフェイトママと一緒に寝ようか」

「……………うん」

「ほら、おいで」

「……………うん」

フェイトが先に入ったベッドに、ヴィヴィオを誘う。

ヴィヴィオはおずおずと潜り込んできた。

フェイトはそんなヴィヴィオを、心底愛しいと言うように、ギュッと抱き締める。

ヴィヴィオはそんなフェイトに、少し笑った。

「……………ふふっ」

「うん、やっと笑ったね」

「……………」

「フェイトママはヴィヴィオが笑ってくれるから頑張れるんだ」

「……うん」

「何があったの、ヴィヴィオ」

「……っ」

躊躇うようなヴィヴィオ。

「ヴィヴィオに悪いようにはしないって約束する。それに、今日のこととは誰にも言わない。なのはママにも」

「なのはママにも……？」

「うん、私とヴィヴィオだけの秘密だ」

「……うん」

そうしてポツポツと、ヴィヴィオは語ってくれた。

森林公園に隣接した魔法練習場で、男の人と出会ったこと。

すごく強いこと。

ストライクアーツの練習をつけてくれたこと。

練習の後に彼がくれるドリンクがおいしいこと。

彼のお陰でヴィヴィオは強くなれたこと。

悪戯してくるのには困ったこと。

武道家として大切な事を教わったこと。

アインハルトとの試合は彼のお陰で引き分けにできたこと。

ひとつひとつの大切な思い出を振り返るように、ヴィヴィオは語ってくれた。

時には嬉しそうに、時に楽しそうに、時に拗ねたように語るヴィヴィオの様子に、フェイトまで楽しくなってくる。

「そっか、ルシウスはヴィヴィオの大切な人なんだ」

「………う、うん。大切な人」

ヴィヴィオは始め躊躇ったが、やがておずおずと恥ずかしそうに真っ赤になって言った。

フェイトは顔が赤らんだヴィヴィオを見て、まるで乙女の告白みたい、だなんて見当違いな事を考えていた。

「それで、どうしたの？」

「……」

フェイトの言葉に、ヴィヴィオはまた思い出したように落ち込んで

しまう。

しかし、意を決したように話を進めた。

「フェイトママ……わたし、聞いちゃったの」

そうしてヴィヴィオが語るのは、アインハルトとの試合の夜のこと。

なのはとノーヴェの大人の話。

ヴィヴィオの周りには今、ヴィヴィオの出自も立場も、過去の事件も笑い飛ばして良くしてくれる人たちしか居ない。当然だ、他ならぬフェイトたちがヴィヴィオに気がつかせないようにしていたのだから。

しかしヴィヴィオは知ったのだ。

世の中は自分の味方だけでは無いことを。

自分を憎む人が居るかもしれないことを。

ヴィヴィオも自分の立場を分かっていた訳ではない。けれど、ハッキリと自覚できてはいなかった。

最近自分がクローンだということも、JS事件のことも遠い昔の出来事のように感じていた。どこか他人事だった。

聖王教会に遊びに行くと、皆仲良くしてくれて、良くしてくれて、楽しい思い出ばかりの場所だ。けれど、そこは必ずしもヴィヴィオにとって楽しいだけの場所じゃないことを知った。まだ幼いヴィヴィオには、自分に害意があるかもしれない人間の存在がいるというだけでも恐ろしかった。

そして

……なのはがママじゃいられなくなるかもしれない

ヴィヴィオにとって考えたこともない事だった。考えたくもないことだった。

例えば今すぐにどうこうという訳ではなくても、その可能性だけで怖かった。

ヴィヴィオなのはを本当のお母さんだと思っているし、なのはに本当の娘だと思われる自覚もある。

けれど、血の繋がった親子ではない。

今更ながらの事実を思い出させられた。

それを聞いてフェイトはヴィヴィオを抱き締める力を強めた。

「それで、ヴィヴィオは恐くなったんだ」

「……うん」

「それでルシウスと距離を取った？」

「……え？」

「分かるよ、ヴィヴィオの事は。私もヴィヴィオのママだから」

「フェイトママ……」

フェイトにはヴィヴィオの心が何となく分かった。

ルシウスと会いたいけれど、彼に迷惑をかけるかもしれない。

試合の後も練習に行くというルシウスとの約束を破ってしまった。

ルシウスと会うことで、ルシウスの立場によつては、なのはと親子でいられなくなるかもしれない。

なのは達の話盗み聞きしてしまった罪悪感もある。

ヴィヴィオを取り巻く複雑な状況への恐怖もある。

そういった様々な情報や感情がごちゃ混ぜになって、ヴィヴィオの中でオーバーヒートしてしまっていたのだろう。

それでも誰にも言うに言えずに、この小さな体の中に一人で抱え込んでいたのだ。

それを思うと、フェイトにはたまらなくなった。

こんな小さな女の子が友達になった人とも好きに会えないなんてどうかしていると思った。

そして、どうしようもない程にヴィヴィオへの愛おしさが湧いてきて、その小さな頭に頬擦りしたり、額や頬に何度もキスをした。

「ふえ、フェイトママ、くすぐったいよお……」

「いいでしょ、なのはばっかりずるいから。フェイトママだってなのはママと同じくらいヴィヴィオのことが大好きなんだよ」

「そ、それはうれしいのですが」

「いいでしょ、もうちょっとこうしていいよ」

「……もう。しかたないなあ」

そうしてしばらくヴィヴィオをちゅっちゅして堪能していたフェ

イトは、やがてヴィヴィオを抱き締める力を緩める。

「大変だったね。よく頑張ったね、ヴィヴィオ。もう我慢しないでいいから。フェイトママに任せて」

「……え？」

「なのはとは離れ離れになったりしない。私がさせない。それに、きつとルシウスとも会えるようになるから」

「……ほんと？」

「うん。フェイトママとヴィヴィオの約束だ」

「そっか。えへへ。……ぐすつ……ううう……」

「……」

フェイトは再びヴィヴィオを胸に抱きしめ、頭をゆるりと何度も撫でた。

くぐもつて聞こえるすすり泣きの声は、それからも暫く続いた。

泣き疲れて眠ってしまったヴィヴィオに毛布をかけて、フェイトは部屋を出ると、シャーリーに連絡を取る。

ルシウス・マリウスの調査を翌朝までの期限で依頼して、リビングに降りた。

フェイトにはまだ一仕事残っている。

果たして、そこではソファに消沈したように座るなののが。

「なのは」

「……フェイトちゃん」

「ヴィヴィオはもう大丈夫」

「そっか、よかった……ヴィヴィオに何があったの？」

「ごめん、なのは。話せない。ヴィヴィオとの約束なんだ」

「そっか……」

なのははまた落ち込んでしまう。

フェイトは二人掛けのソファに座るなのはの横に腰掛ける。

「フェイトちゃん、わたし、何もできなかった。ヴィヴィオが何に悩んでいるのかも分からないの。ヴィヴィオのママなのに……」

「なのは……」

「えへへ、おかしいよね、こんなの。もつとちゃんとママじゃなきゃいけないのに、どうしちやつたんだろ、わたし」

そう言って泣きそうに笑うなのはフェイトは自分の胸に掻き抱いた。

そしてヴィヴィオにやったのと同じように、ゆっくり頭をなでる。

「フェイトちゃん……？」

「なのは、それでいいよ。なのはヴィヴィオのママで、ヴィヴィオにもそう思われてる。今回のことはなのはが大切だから言えなかっただけなんだ。だから、なのははママ失格じゃないよ」

「でも……」

「それに、私が何とかできた。それでいいんだ。役割の問題だよ。私なものもママだけど、なのははお母さんで私はお父さん。お母さんにしか話せないこともあるし、お父さんにしか話したくないこともある」

「……うん」

すると、フェイトがクスクス笑う。

「それに、ヴィヴィオとなのはは間違いなく親子だよ。一人で抱え込んで、無茶しようとする所なんて昔のなのはにそっくり」

「にゃ!?!」

「似た者同士だから、どうにもならないこともあるんじゃないかな？

私となのは、二人で一人前の親。今はそれでいいんじゃない？」

「……そっか。そうだね」

そう言っただけなのはは照れくさそうに笑った。



その日の朝もまた、ルシウスはいつもの公園に行く。

今日もヴィヴィオが居ないことに落ち込んでいる自分に気がつい

て苦笑を浮かべつつ、誰もいない練習場で最早日課となっている練習を始める。

暫く練習を続けていると、ルシウスは自分に近づいてくる足音を聞きとった。

もしかするとヴィヴィオだろうか、という期待を抱きつつそちらを振り向くと、ヴィヴィオでは無く、目の覚めるような美女がいた。腰まで流れる金髪は朝日に照らされて淡く輝いており、その深い紅い目は彼女の思慮深さと優しさを写し出す鏡のようだ。ヴィヴィオの金髪が太陽のような輝きだとすると、彼女の金髪は月明かりのような神秘的な魅力がある。誰もが羨むようなルックスとスタイルの良さも相まって、まるで月の女神のような女性だった。

そんな絶世の、と枕詞が付いても何らおかしくない美女がルシウスに近づいてきている。彼としては心当たりが全く無く、困惑するばかりだ。

「……あの、どうしましたか？」

「なんでもないよ、私のことは気にしないで続けて？」

「いやいや、何でもない事はないですよ。何か用が有るんじゃないんですか？」

「用事……。強いていうなら君の事が知りたい、かな」

「はあ……」

そうは言われなくても……。

ルシウスの率直な思いである。それはそうだ、初めて会うこんな神秘的な美女がどこか楽しそうに微笑んで自分の練習を見つめてくる。このシチュエーションに慣れるという方が無茶だ。彼女程の美女に見つめられれば、男の性として自然とドギマギしてしまう。それ以前に知らない人に見つめられて落ち着いていられる人もそうはいまい。「特に用がないなら見ないでもらえませんか？」 気が散って仕方がないです」

「えっと、ごめんね、それはできないんだ」

「だから、何ですか？」

「ごめんね」

彼女は此方から何を言っても小揺るぎもしない。仕方がないのでルシウスとしても努めて気にしない事にした。というか、するしか無かった。

さらに30分程練習を続けているが、依然として女性はそこにいる。優しい微笑みを浮かべつつ、しかしその瞳に真剣な光を宿して。

ルシウスはそろそろ終わらせる時間だと、備え付けてあるベンチに座る。するといつの間にか近づいてきていた女性がルシウスに飲み物を差し出した。ルシウスが好きで、ヴィヴィオにも買ってやったものだ。

「はい。……おいしいね、これ」

そう言つて女性はルシウスに渡した物と同じドリンクを両手で持ち、こくこくと嬉しそうに飲む。

ここまでされると普通は怪しいと感じるものだろうが、ルシウスは女性に不思議だという印象を抱いた。女性の優しい雰囲気によるものか、美人は得と言うべきか。

すぐ側の自販機で買ったものであると分かっているので、迷惑料のつもりか、と思いつつルシウスもありがたく頂くことにした。

「それで、いい加減何の用か教えてくれないんですか?」

「うーん、そうだね。でも、まずは名前を教えてください。私はフェイト・テストロッサ・ハラウン。フェイトって呼んでね」

「はあ、分かりました、フェイトさん。俺はルシウス・マリウスです」

「うん、ふふつ、ルシウスだね」

ルシウスの名前を呟いて嬉しそうに微笑むフェイト。その仕草についルシウスもドキリとする。何だか全方面で勘違いを誘発しているような女性だ。

「ルシウス、実はもう私の用事つて終わったんだ。君の事を知りたいっていうのは嘘じゃない」

「そうですか。じゃあ何故俺を?」

「そうだねえ、うーん、そうだなあ……うん。いつか分かるだろうから内緒、ね」

フエイトはその言葉に合わせてパチンとウインクした。

「いや、内緒って……」

「所で、ルシウスはそろそろ時間じゃない?」

「ええ、そうですが……」

「じゃあまたね、だ。あ、それと明日は絶対に同じ時間にここに来て。きつと良いことがあるから。君にとつても、君の大切な人にとつても」

「え? それってどういう……」

「ばいばい」

フエイトはスタスタと去ってしまった。

「なんだったんだよ……」

ルシウスの眩きが空しくその場に響いた。

結局、その日もヴィヴィオについての有力な手がかりは見つからなかった。ヴィヴィオがコーチだと言っていたノーヴェについて一応調べられたが、それも名前とストライクアーツ有段者であることが調べられたくらいだ。そもそも、名前と容姿しか知らない人間を見つけて出そうという時点で無理がある。

翌日もルシウスは自然公園に行く。

日課だからであつて、昨日の女性に言われたからではない、とルシウスは心の中で誰に対してか分からない言い訳をしていた。

本日も日課のストライクアーツの練習をするかと支度をしていると、ふと人の気配を感じる。昨日に続いて今日は何だ、とルシウスが周囲を伺っていると、木の影から金色の髪の毛がチラリと見えた。

ドクン、と大きく鼓動がはねた。

フエイトのような淡い月明かりのような金ではなく、天で輝く太陽のような金。

ルシウスは駆け出した。一直線に、木の裏に隠れる少女のもとへ。

「……ヴィヴィオツ!!」

「へあっ!？」

果たして、そこには金の髪と翠と紅の瞳を持つ太陽の落とし子のような少女がいた。

一応トレーニングをするつもりだったのか、いつものトレーニングウェアだ。

「あ……ルシウス、さん……」

「ヴィヴィオ、お前、なにやって、どうして……」

「るしうす、さんっ」

ふんわり、と暖かい感触。

きゅつと胴体を締められる感覚。

目の前には金のサラサラとした髪。

「ごめんなさい。ごめんなさい。るしうすさん、ごめんなさい」

色々と言いたい事はあつたはずだけれど、言葉としては何も出てこなかった。

ただ、暖かい春の陽気と早朝の静けさ。

ぐずぐずと鼻を啜るような音と、湿る胸元。

そんな事実を事実とだけ認識して、ルシウスは微笑んだ。

自分の胸の内から沸き上がる気持ちを自覚しながら。

今はただ、愛しい少女とまた会えた事を喜ぼうと、胸元で泣いているヴィヴィオの頭をそつと撫でた。

気付き

胸元にすがり付いてぐずぐずと泣いていた少女も、ようやく落ち着いてきたようだ。

ただ、落ち着いてきた今でも、もう二度と離れないとばかりに抱きついたまま放そうとしない。今までならば恥ずかしがって抱きつくなどできなかったヴィヴィオだが、今は自分がしている事を理解して、顔を真っ赤にして恥ずかしそうにしながらも嬉しそうに抱きついている。

たった一週間会わなかっただけで大袈裟なと思いかねないが、ヴィヴィオはルシウスともう二度と会わない覚悟をしていたし、それも仕方がない事なのかもしれない。

そんな事情はルシウスにも何となく分かっていた。しかし、抱き付かれたままだと薄いトレーニングウェア越しに感じる女らしくも引き締まった体つきとか、すぐそばから漂ってくる甘い香りに落ち着かなかった為、ヴィヴィオの気が済んだ頃を見計らってそっと体を離れた。

「むう……」

口を尖らせたヴィヴィオはしかし、これだけは譲れないとばかりにずっとルシウスの手を握りしめたままだが。

するとヴィヴィオが思い出したとばかりに、少し誇らしそうに話し始めた。

「あ、そうだ！　あのね、ルシウスさん、アインハルトさんとの試合は引き分けだったよ！」

「そうか！　相手はかなり格上だったっけ？」

「そう！　私よりもずっと前から格闘技をやってて、どれくらい鍛えてきたのか分からないくらい」

「凄いいじゃないか！　よくやったなあ。流星は俺の弟子だ！」

ルシウスは少々大袈裟に思えるくらいに反応して、ヴィヴィオの頭を撫でる。

これはルシウスの師の教えだった。いつかルシウスが教える立場になった時、褒めるときは思いつき褒めろ、それが厳しい訓練の原動力になる、と。ルシウスは実際にそうされてきたし、ヴィヴィオの頑張りを思うと自然と言葉が出てきていた。

「えへへっ。次はわたしが勝ちますよ!」

その効果はヴィヴィオの顔を見れば瞭然だろう。嬉しそうにはにかむヴィヴィオは、次へのヤル気に満ちている。

「その意気だ。次は俺も応援にいくよ」

「ホントですか!?

やったっ!

約束ですよっ!

わたし頑張ります!」

そんなヴィヴィオの意気込みを嬉しそうに聞いていたルシウスは、ふと真剣な表情になった。

「それで、何があつたんだ?」

「え? あ……」

その言葉にヴィヴィオも浮かれた気分が落ち着いていたのか、少し落ち込んでしまった。

ルシウスもヴィヴィオのそんな表情は見たくなかったが、それでも聞かなければなるまい。

「あの、えっと……うん。話します」

少し躊躇ったヴィヴィオだが、しかしオズオズと話し始めた。ヴィヴィオの心に今までに感じたことのない類いの怖れが過ったが、さすがにここで黙るのは不誠実だと思った。

「……わたし、聖王のクローンなんです」

「……は?」

そうして語られた内容は、余りに突拍子のないものだった。会社員の父と専業主婦の母の間に生まれたルシウスには、違う世界の出来事のようにも感じる。

聖王もJS事件もクローン技術も、ルシウスのこれまでの人生では他人事だった。精々が報道で見る程度。これから先も一生関わることは無いと思っていた。否、それも正確ではない。そもそもが関わるなんて可能性は考慮にすら上らなかつた、が正しい。それほどまでに

二人の人生は離れたものだった。しかし何の因果かルシウスは今現在、そんな聖王の生まれ変わりとも言える少女の隣にいる。

正直、戸惑いが無いと言えば嘘だ。しかしルシウスはその思いを顔には出さなかった。それを話すヴィヴィオの不安そうな表情を見て、そんな不用意なことをできるはずがなかった。

だから、ルシウスはなにも気にしていない態で話を続けることにした。

「つまり、今回の騒動はその聖王の事とかが関係しているんだよね？」
「はい。おおむねそんな感じです。ただ、ほとんどわたしのはやとちりだったのですが……」

「……はやとちり？」

「ルシウスさんと会うのは何の問題もないってことです！」

一瞬、早とちりで振り回されたのかとイラツとしかけたルシウスだが、ヴィヴィオは本当に嬉しそうだ。

そんな顔を見ると、ルシウスは何でも許してしまえる気分になった。

それに、まだ聞かされていない事も有りそうだ。早とちりと言うが、何を早とちりしたのか。その事について少しでも力になればという思いはあれど、今聞くべき事でもないと思った。

「……まあ問題が無かったなら良かったよ。……さて、ヴィヴィオは最近朝のトレーニングをやってないんだろ？
ならそろそろやるか。話の続きはその後だ」

「え、あつ……はいっ！　　お願いしますっ！」

なので、色々考えるのは後にして、とりあえずヴィヴィオとの時間を楽しんでしまうことにしたルシウスだった。

久しぶりのトレーニングはとても有意義だったとヴィヴィオは感じた。

放課後にノーヴェや友人達とのトレーニングも続けてはいたが、やはり身が入っていなかったし、ルシウスとのトレーニングは段違いに成長を感じられるのもある。

気になる男の人と会うことは問題無いらしい。フェイトに思いは伝えたのだし、これは親の公認だ。ひいては教会の大人たちの公認ということにもなる、とヴィヴィオは考えた。そうでなければフェイトが認めてくれないだろう、というのはいこの間知った事だ。ヴィヴィオはおませな女の子、恋だつてするのである。

趣味と実益を兼ねたストライクアーツの練習も良い感じた。

良い家族や友人にも恵まれて、学業の方も一切問題ない。

今のヴィヴィオはまさしくリア充だった。

そんな風に浮かれっぱなしのヴィヴィオは、練習の時間が終わり、これまた久しぶりに飲み物を飲んでルシウスとのんびりとした、お気に入りの時間を楽しんでいた。

今日は昨日までの反動なのか、反省なのか、お互いに少し踏み込んだ話にも発展している。色々な話をした。好きな食べ物から得意な魔法などなど、本当に様々な事を。

その中でお互いの学校について話が及んだ。

「そういえば、ヴィヴィオは学生って言ってたけど、どこの学校なんだ？」

「あれ、言ってませんでした？」 St. ヒルデですよ！」

「St. ヒルデ!? あそこの高等科といったら超名門じゃないか！」

「え、高等科……?」

「ん? ヴィヴィオくらいの年齢なら高等科だと思ってたんだけど。飛び級してるのか?」

「へ? 飛び級……?」

「ん……?」

あれ、何言ってるんだらうルシウスさんったら。わたしが高等科の生徒に見えるわけ……

「……………あぁっ!!」

「!?」

何か噛み合わない会話だと不思議に思ったヴィヴィオだが、ふと気がついた。

わたしルシウスさんと大人モードでしか会っていないんじゃないか……？
と。

「お、おいどうしたヴィヴィオ!? 冷や汗で凄いことになってるぞ!」

「い、いや、なんでもありませんよー! なにも無かったんです、ホントに!!」

いきなり尋常ではない様子になったヴィヴィオに驚くルシウス。
パニックに陥ったヴィヴィオは、咄嗟に誤魔化してしまった。

「いや、何もなかったようにはとても見えないけど……」

「と、とにかく! なんでもありませんっ! それより、

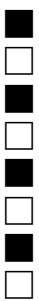
今日はそろそろ帰りましょう!」

「あ、ああ。そうだな……」

「ではまた明日! 今日ありがとうございました!

明日また来ますからッ!」

一方的に捲し立てるとヴィヴィオはさっさと去ってしまった。



どうしよう……

ヴィヴィオはひたすら悩んでいた。

これまでヴィヴィオは朝のトレーニングに行くときは、家から大人モードに変身していた。これは行き帰りのランニングでも、大きくなった体の感覚に馴らす為だ。折角習得した魔法なのだから少しでも早く、少しでも上手くなりたい、というヴィヴィオの向上心があだになった形だ。

ルシウスはヴィヴィオを同年代だと思っている。そんな事にも気がつかなかった自分に呆れてしまう。でも、ヴィヴィオもまだ大人モードに馴れておらず、人に見られる意識が薄かったのだ。なんて事が言い訳にならない事は分かっている。

これでは結果的にルシウスを騙していることになるのではないか。大人モードは自分の魔法である以上、知らなかったでは済まないの

だ。

けれど、だからと言ってどうすればいいのだろうか。素直に打ち明けたとして、それで関係が崩れてしまったりしないだろうか。率直に言えば、ヴィヴィオは恐かった。

「ヴィヴィオ、どうしたの？　美味しくなかった？」

そんなヴィヴィオを見かねてか、なのはも心配げだ。しかし先日までの痛々しい笑顔ではない分、まだ安心できていた。

ちなみに今日はフェイトはまだ寝ている。連日の激務の疲れが溜まっていたようだ。それを分かっているのはは、キングサイズの一緒のベッドで隣に寝ていたフェイトを起こさないようにそつと抜けてきた。

「あ、ううん、今日も美味しいよ、なのはママ！」

「そう？　悩みがあったらなのはママにも言ってね？」

「うん……」

そしてまた俯いて考え込んでしまったヴィヴィオ。しかしふいに顔を上げた。

「あ、じゃあひとついいですか？」

「うん、なあに？」

「大切な人に隠し事しちゃって、それがバレたら今までの関係じゃなくなっちゃいそうな時、ママならどうする？」

「え？　ううん、難しい問題だね……」

ヴィヴィオの話を聞いて、なのはの脳裏を過るのは幼い頃のこと。ちやうど今のヴィヴィオと同一年くらいの時だ。

家族にも親友にも黙って、魔法の世界に足を踏み込んだ。あの頃のはは魔法少女は秘密にやるものだと思っていたし、ユーノの為だという免罪符もあった。

しかし、大人になって改めて考えると、皆には無い大きな力を持った自分を恐がられないだろうか、という不安が無かったと言えば嘘だ。

なんだか同じような事で悩むんだな、と思うとヴィヴィオとの母子の絆みたいな物を感じて少し嬉しくなる。

誰に何を秘密にしているのかは気になるけれど、なのはは敢えて聞かなかった。ヴィヴィオは聡い子だ。必要な事ならば自分かフェイトに言ってくれるだろう。と信じる事にした。

先日までの一件を通じて、なのはも見守る事を覚えた。フェイトに諭されて、二人で沢山話し合って、自分一人でヴィヴィオを背負っていかないと、と気張っていた自分を思い直した。ヴィヴィオのママがなのは一人だけでない事を、改めて思い出したのだ。

それに、今のヴィヴィオと似ているらしい過去の自分を思い出して、親になんでも首を突っ込まれるのも気分は良くないだろうと分かる。

確かにヴィヴィオは特殊な立場で、首を突っ込みたくもなるけれど、そつちの裏方は主にフェイトが担ってくれている。ならばなのはの役割は、なるべく普通の母親としてヴィヴィオを育てる事だと思うのだ。

なのはの中の普通の母親は、なのはの母である桃子だ。今考えると、桃子もきつとなのはが隠れて魔法少女をしていた時に何か気がついていたように思う。自分も母親の立場に立つと、娘の隠し事なんて通用しないことがよく分かる。もどかしかっただろうけれど、なのはをそつと見守ってくれていた。きつとそれにはもつと幼い頃になのはに寂しい思いをさせた引け目もあつたのだろうけれど、それでもなのはには常に帰れる場所があると安心できていた。それがどんなに大変な事かは母親になって初めて知った事だった。

要するに、なのはにはある意味で母親としての余裕が出来てきていた。

そして今、ヴィヴィオはなのはに相談を持ちかけてくれた。ならばなのはのやるべき事は、母親として道を示してあげることだ。

「ヴィヴィオはその人とどうしたいの？」

「ええと、今までの関係もいいんだけど、でも、もつと仲良くなれたら嬉しいな……」

「そっか。ヴィヴィオはその人が大好きなんだね」

それを聞いたヴィヴィオは恥ずかしそうに顔を赤らめつつも、ちい

さく頷いた。

それを見て、ヴィヴィオに新しい友達ができたのだろうかとなのは嬉しくなる。

この間まで悩んでいたのもその人の事なのかな。もしかしたらその相手は、この間試合したというアインハルトちゃんかも。なんて見当違いな事を考えるのはだった。この辺りは思考の形がヴィヴィオのもう一人の母親とよく似ている。

「じゃあ思いきって明かしちゃわない？　そんなに大切な人なら分かってくれるよ！」

なのはは何にでも全力全開。全力でぶつかっていくのが基本のスタンスだ。

「それは……」

しかしヴィヴィオは乗り気ではない。当然だ、それが出来るなら悩んだりしない。

それはなのはも分かっていたのか、言いよどむヴィヴィオに苦笑していた。

「じゃあ、隠し事のない、ありのままのヴィヴィオを好きになって貰えるように頑張つて、それから秘密を明かすのは？　　そんなに大切な人に、いつまでも隠し事するのは難しいってママは思うな」

「……ッ!!」

母の言葉にヴィヴィオは天啓を得たような顔をした。

「それッ!!　　それだよなのはママッ!　　ありがとつ、マ

マ!　　だいすきっ!」

そんな簡単な解決策があるなんて、ヴィヴィオには全く思い付かなかった。追い詰められて視野が狭まっていたのかも知れないとヴィヴィオは考えたが、今はどうでも良いことだ。

「ふふつ、ママも大好きだよ!　　あ、そうだ、今度その人をママ

にも紹介して欲しいな。とびっきりのご飯を作っちゃうよー!」

「うん、分かった!　　よーし、がんばるぞーっ!」

「ふふつ」

とたんに元気になったヴィヴィオを見て嬉しそうにしているなの

には、ヴィヴィオがボソリと呟いた言葉を聞き取れなかった。

「……そうだよ、ルシウスさんにありのままの私私を好きになっても
らえば良いんだよ」

「うん？　　なにか言った、ヴィヴィオ？」

「なんでもないよー、なのはママ！」

そう答えるヴィヴィオの顔は、幼いながらに女の顔になり始めていることに、なママのは気がつけなかった。

Lの一番長い日

ルシウスにありのままの自分を好きになつてもらおうッ！

と決意したヴィヴィオだが、しかしどうすれば良いのかはサツパリ分からない。当然だ、ヴィヴィオはまだ幼く、そんな経験はない。

ならば誰かに相談しようとなるのだが、ヴィヴィオには頼れる相手が殆ど居なかった。

一番始めに候補に上がったのは、八神家のヴィータだ。

彼女は純粋な人間ではなく、歳を取ることがない。ならばヴィヴィオと似たようなシチュエーションも経験した事があるのではと考えたが、却下とした。

あの主が命の守護騎士たちが恋愛なんてヴィヴィオにはまるで考えられなかった。

それに、ヴィヴィオは知らぬことだが、そもそも恋愛感情というものの自体が備わっているかも疑わしい。主と書を守る守護騎士に、恋愛感情など邪魔にしなければならない。若い女性を象つていれば尚更に。今代の主の元で穏やかな生活をして、確かに人間らしくなった守護騎士だが、あくまでもらしく、なのだ。

色々と悩んで、次に候補に上がったのは、^{フエイト}母の義理の兄のお嫁さん、エイミイだ。

しかしこれも即座に却下した。

エイミイは遠く離れた別世界に住んでいる為、ヴィヴィオとは滅多に会うことがない。ヴィヴィオとは親戚のお姉さん程度の繋がりだ。率直に言えば、恋愛相談できる程の仲ではなかった。

次に候補に上がったのは、ルーテシアだ。

しかしこれも即座に却下した。

ルーテシアはわりと口が軽い。ヴィヴィオはまだ事を大きく広めるつもりはないのだ。広めるならば、王手をかけてから。相談なんてできなかつた。

それにヴィヴィオは、実はルーテシアがキャロとの水面下での戦争

に敗北した事を知っている。やはり六課の一年間は長かったのだ。

そんなルーテシアに相談するのは、言ってはなんだが、縁起が悪い。ならばキャロはどうかとなる訳だが、キャロはママフエイトに似て天然な所がある。本人も無意識に情報を漏らしてしまう可能性を考えると難しかった。

それに、キャロは勝者でこそあれ、そのバトルスタイルはヴィヴィオとは違うと感じていた。ヴィヴィオは文系頭脳プレイヤーなのだ。他にも色々候補を考えたが、どれも候補から先には上がれない。聖王教会関係は、この間の件もあつて却下だ。管理局関係は、所詮は母を通じての繋がり。お世話になつていても、プライベートルな相談をしたいとは思えなかつた。

要するにヴィヴィオは手詰まりだったのだ。

ちなみに、二人の母は初めから除外している。なのはとフエイト

あの二人に相談するのは、なんというか、何か致命的な部分でダメな気がするのだ。

「それで、私ですか……」

「いいじゃないですか。むしろ後輩に相談されるなんて光栄なことじゃありませんか。アインハルトさん」

そう、結局ヴィヴィオが選んだのは、アインハルトだった。

二人は現在、学校の近場にある兎の喫茶店のテーブル席で向かい合っている。

「しかし、なぜ私なのですか？ 私には色恋の経験は……」

「ありませんよね？ わかつてます、それくらい」

「……私はそんな事にかまけている暇はありません。霸王の悲願を達成するためにも、遊んでいる暇などないのです」

「相も変わらぬ武装色ですねえ」

そういうヴィヴィオは霸王色だと自負している。

「しかし実際、私が相談事に適していない事は自覚しています」

「……色々考えて、アインハルトさんしか居なかつたんです」

的確なアドバイスが得られるかは別にして、アインハルトはある意味、ヴィヴィオが相談する相手としては適していた。

アインハルトは口が硬い。まず、学校でほぼボツチのアインハルトには、話せる相手がいないのだから。

その上、母の繋がりありきの知り合いではない為、ヴィヴィオの周りの人間に話が広がりにくい。

しかも、面倒なしがらみは殆どない。霸王の子孫と言っても、それはなのはの故郷である日本で言うところの戦国武将の子孫程度の意味しか持たない。それがどんなにビツクネームでも、ヴィヴィオと聖王教会のように現在まで続くしがらみはないのだ。中には当然、現在まで力を持つ家もあるが、アインハルトはこの限りではなかった。

それに、アインハルトはヴィヴィオの周りで大人モードを使う数少ない一人だ。もしかしたら似たような経験があるかもしれない。そうでなくとも大人モード歴はアインハルトが先輩なのだ。何か得るものがあるかもしれない。そう考えての人選だった。

相談にかこつけてアインハルトと二人で会いたいという気持ちが無いといえば嘘になるが。

「まあいいでしょう。本来ならば一刻も早く鍛練に戻りたい所ですが、後輩のワガママを聞くのも先輩の努めということですよ」

憎まれ口ながらに、少し気恥ずかしそうで、どこか嬉しそうなアインハルトだ。

貴女しか居ないと言われれば、悪い気はしない。

「なんだかんだ言いながらお願いを聞いてくれるツンデレハルトさんのこと、わたし、好きですよ」

「人をアホみたいの名前にするのは止めなさい」

こう言いながらもアインハルトはそっぽを向いている。不意に好意を告げられて恥ずかしかったのだ。

だから、恥ずかしそうにするアインハルトを見てニヤニヤしているヴィヴィオには気がつかない。

「ご注文はお決まりですか？」

そこに、頃合いを見計らったのか店員が注文を取りに来た。頭に白いもふもふした生物を乗せた若い女の子だ。

「あ、はい。じゃあわたしはオリジナルブレンドをお願いします。あ

と、特性パンケーキもッ！」

「……同じものを」

「かしこまりました。しばらくお待ち下さい」

下がって行った店員を見送ると、本題に入る。

「それで、男性を籠絡する方法でしたか……」

「いやまあ、そう聞くと凄く下世話な感じですけど、そんな感じではありません」

「しかし、そうであれば尚私には分からないのですが……」

「そんな事言つてアインハルトさんがモテること、わたし知ってるんですよ！」

「そんな事実はありません」

「そんなはず無いですけどねえ……」

事実としてアインハルトはモテる。ただ、彼女の人を寄せ付けない雰囲気、話しかけづらくしているだけで。しかしそんなアインハルトの態度は一層、彼女を高嶺の花にしており、その噂は初等部のヴィオオの元まで届いている。知らぬは本人ばかりだ。

こんな風にしばしば雑談を挟みつつも、二人の相談は三時間に上った。

結局アインハルトと相談しても、これといって具体的な案は出なかった。

変わりと言つてはなんだが、アインハルトは思いの外男性について良く知っていた。

しかしそれも少し考えてみれば当たり前の事で、アインハルトには先祖の、霸王の記憶がある。ご丁寧にその想いまで受け継いでいる。確かに完全な形の記憶継承ではないのだが、それでも男性の気持ち、というものを理解する上での大きな手助けとはなっていた。

少し脱線するが、話を聞いていてヴィオオはひとつ、考えてしまった事がある。

アインハルトは記憶の中で男性のモノを見たこともあるだろうか、と。

その上霸王は結婚したのだ。

ならば王妃との行為を記憶に見る事もあったのかもしれない、と。非常に気になったヴィヴィオだが、流石にそこまでは聞けなかった。

ちなみにヴィヴィオはフェイトが聞かせてくれた、子供はコウノトリが運んでくるなんて話は信じていない。

ヴィヴィオは以前、なのはの部屋にあったお洒落なお洋服が載った雑誌をこっそり読んでしまったことがある。綺麗な女の人が着飾った姿にヴィヴィオは憧れて、次へ次へと読み進めていく。すると、とある特集の見出しが目に留まったのだ。

『今からでも遅くない！
始めての時にカレと楽しむ体位10選』

ヴィヴィオは一通り読んで、酷くカルチャーショックを受けたものの、そつと元あった場所に戻しておいたものだ。

閑話休題。

とりあえず、ルシウスと会うときは暫く、今まで通り大人モードも使おうとヴィヴィオは決めた。その上でゆつくりと子供のヴィヴィオも好きになつてもらおう。

なのはとは大人モードを魔法や武術の練習や実践だけに使い、イタズラや遊びには使わないと天と星に誓って約束している。けれど、ヴィヴィオは真剣なのだ。これはイタズラに使っている訳ではないし、実践のようなものだ、となのはとの約束を恣意的に解釈した。

ヴィヴィオにはこれが詭弁でしかない事が分かっているし、自分を信じてくれたなのはや騙す形になるルシウスに申し訳ない気持ちもある。気付かずにやるのと分かっているやするのは違う事も理解している。

けれど、それでもヴィヴィオには譲れなかった。罪悪感には屈しなかった。

後でいくらでも謝ろうと思う。大人モードはダメだと言われたら封印しても良い。けれど

———今だけは許してください……

もしかするとこれが、母を愛する娘の、親離れの第一歩なのかもしれ

れない。



ルシウスは格闘技選手として、自分の状態を把握する術は持っている。

そんな彼は、現在自分が程よい緊張状態にあることを感じ取っていた。

彼はこれからヴィヴィオとクラナガンに出かける予定なのだ。要するにデートである。

ルシウスとてデートの経験くらいある。ただ、その相手がヴィヴィオだと考えるとどうにも落ち着かない自分がいるのだ。

「……やっぱりそういう事だよな、これ。」

ルシウスは自分を客観的に見て、そう判断した。

ルシウスは特別に鈍感な訳ではない。

改めて自分の気持ちも理解したし、ヴィヴィオからの好意もなんとなく察している。

彼も武道に身を置いていた以外には普通の男子、気になる女の子とのデートともなれば嬉しいものだ。

すると、待ち合わせ場所の列車駅に少女がやってきた。

金の髪に異色の虹彩。ルシウスを見て嬉しそうに笑うその顔は太陽のようだ。

待ち人であるヴィヴィオが彼の元に駆けてくる。今日は普段の練習着とは異なり、よそ行きの格好でお洒落していた。白いワンピースの上に薄いカーディガンを羽織っただけの格好はシンプルながら、素材の良さが際立っている。

お嬢様のような格好をしたヴィヴィオは、まるでどこかのお姫さまのようだ。というか、聖王さまだ。

とりあえず、今朝もあつた訓練の時に比べても見違えるように清楚に見えるヴィヴィオ。普段の活発な彼女とは見違えた姿に、ルシウスはなんとなく照れくさくなる。

「さつきぶり、ヴィヴィオ」

「はい、さつきぶりです！ あの、お待たせしちゃいましたか？」

「いや、今来た所だ。気にしなくていいよ」

「えへへ。それは良かったです！」

ヴィヴィオは本気で安心してている。どうやらお決まりの定型文として言ったわけではないようだ。

しかし、いつもと違う服装に、違うシチュエーション。改めてデトすることを理解して、ルシウスの心臓の鼓動が少し跳ねた。

「……………？ どーしましたか？」

「いや、なんでもない。その格好も似合ってるよ」

「え……………？ あっ……………」

ルシウスの素直な言葉に途端に恥ずかしそうに身をよじったヴィヴィオだが、次第にとても嬉しそうに微笑んだ。

「……………ありがとうございますっ。ママにお洒落着を借りてきちやいましたっ！」

当然、こっそりと。

「へえ、仲いいんだな。……………じゃあ行こうか」

「はいっ！」

そうしてヴィヴィオを先導するように歩き出したルシウスだが、少し歩くとさっそく違和感に気がつく。

「……………あれ？！」

「どうしましたか？」

ヴィヴィオの声が先程までよりも下から聞こえてきたのだ。

不思議に思い振り向いたルシウスは驚いた。

「……………い、いや、ヴィヴィオ、いきなり小さくなったよね……………」

「えへへ、びっくりしました？ わたし、変身魔法が得意なんです！」

「……………へえ。器用なモノだなあ」

ヴィヴィオも嘘はついていない。どちらが本当の姿かを言っていないだけで。

「しかし、なんでいきなり?」

「うーん、えーつと……ひみつ、です。ふふつ」

そう悪戯っぽく微笑むヴィヴィオの顔が、ルシウスには何故かどことなく蠱惑的に見えた。

幼くなつたヴィヴィオにそんな事を感じるなんてどうかしている、とルシウスが自分で自分を訝しんでいると、そつとルシウスの左手に温かい何かが触れる。

ヴィヴィオがそつと指を絡めていた。

「ヴィ、ヴィヴィオ……?」

「いいですよね?」

「いや、いいけど。今日ずっとその姿でいる気か?」

「そんなことないですよーっ!」

ヴィヴィオはルシウスの目の前で見慣れた何時もの姿に戻る。

二人の手を絡めたままで。

ルシウスはその光景に、小さなヴィヴィオと大きなヴィヴィオが同一人物だと強く印象付けられた。

ヴィヴィオにいきなり手を繋がれた事も、いつもと違う姿だということもあつてどこか現実味を感じていなかった部分もあった。

要するにいきなり小さくなつたヴィヴィオに少し混乱していたのだ。

そんな彼女は繋いだままの手を見つめて二度三度とにぎにぎすると、満足げに笑つた。

しかしルシウスも困惑するばかりでもない。気になる女の子と手を繋げれば普通に嬉しいものだし、取り乱す程にウブでもない。

「何がしたいのか良く分からんが、まあいいさ。今度こそ行こうか」

「はいっ♪」

二人はそのまま、再び歩き出した。

「へんげんげん」

そんな二人を遠くから見つめる影。
何かが起こりそうな、そんな危険な色を孕む笑い声が漏れている。

Lの一番長い日2

「ん……うん……」

目が覚めた。

「……え？ あれ？」

動けない。

「え……？ え……っ？」

見ると、手首と足首が大の字を描くように、鎖で繋がれている。

「なに……？ これ……」

今日はルシウスとのデートの日。

今日の予定が決まってから、色々なお店を調べたし、お洒落の本もたくさん読んだ。

何を話そうかな、どんな事をしようかな、と何度もイメージトレーニングをしたし、ルシウスに子供の姿に馴れてもらうための案もいっぱい考えた。

ルシウスが気がついたかは分からないけれど、実は少しだけお化粧もしていた。

初めての経験で、ママにナイショで練習している時も何度も失敗してしまっただけれど、キレイな自分を見てもらう為だと思ったら何も苦じゃなかった。

今日のデートは大成功と言って良いだろう。

ヴィヴィオはとても楽しかったし、ルシウスも楽しんでくれている事がヒシヒシと伝わってきた。正直、浮かれていた自覚はある。けれど、それほど幸せだったのだ。

楽しくて、幸せで、現実じゃないような、地に足が付いていないような、そんな感覚。

それで、最後に……

「あれえ？ 起きたんだ、聖王さま」



8時間前。

とりあえずヴィヴィオが見たいショーがあるそうで、今日の行き先はそれである。

あとは特に目的を定めず、気の赴くままに動く事にした。

本日の目的はお互いにのんびりして、相互理解を深めることにある。なればこそ、特にスケジュールを詰めず、強いて言うなら一緒に居ることが目的のようなモノである。

「あの、これ、よかったらどうぞッ！」

今は二人で公園のベンチにて。

ヴィヴィオがおずおずと持ってきた小箱を差し出した所だった。

朝早くに起きて、なのはに手伝ってもらいつつ、どうにか作り上げたお弁当だ。

「ああ。ありがとう、嬉しいよ。頂こう」

穏やかに微笑んだルシウスがそう返してくれた。

その笑顔に、ヴィヴィオの心臓がドキツと跳ねた。これだけでも早起した甲斐があったモノだ。

「……あ、そうだ」

そこでふと、ヴィヴィオに思い付く事があった。

「どうした？」

「いえ、なんでもないんですよー！」

「そうか？」

首をひねりつつ、ルシウスが食事を再開させようとする。

「あ、ちよつとまってください！ えへへ、えと、はい、あーん」

少し形が崩れた卵焼きを恥ずかしそうにおずおずと差し出すヴィヴィオ。

ルシウスもその破壊力には圧倒されてしまう。

「あ、ああ。ありがとう、ヴィヴィオ……うん、うまい」

実際、ヴィヴィオの弁当は美味しかった。

確かに所々形が崩れてしまっているが、味付けはとても良い。

「えへへ。よかったです。実はママにも手伝ってもらっちゃったんで

すけど」

因みにヴィヴィオは友達と食べると言っ手伝ってもらった。間違ってはいない。「まだ」友達なのだ。ヴィヴィオはその関係で満足できそうにはないけれど。

しかし、友達と食べるには明らかに気合いが入りすぎているヴィヴィオを見て、額面通りに受け取ってしまうのはもなのはだろう。しかしヴィヴィオはママのそんな純粹で少し天然な所も大好きだった。

「それでも大したものだよ。うん、うまい」

本当に美味しそうに食べてくれるルシウスに、ヴィヴィオの機嫌も良くなる。

「じゃ、じゃあこんどは目を瞑ってくれませんか？ 何を食べてるのか当ててみてくださいっ！」

「ん？ まあいいよ」

「ふふっ、はい、あーん！」
「……うん、ハンバーグだな。これもやっぱり美味しい、って……うお！」

ルシウスが目を開けると、すぐ目の前に自分に箸を向ける愛くるしい初等科くらいの女の子が。

「とうか、今朝も見た変身したヴィヴィオだった。」

「……なんでまた、そっちの姿に？」

「いえいえ、なんででしょ？」

悪戯っぽく笑う小さなヴィヴィオ。

「なんだか小悪魔という表現がピッタリ当てはまりそうだな。」

「もう一回、はい、あーんっ」

「今度もヴィヴィオは小さいままでおかずを差し出してくる。」

しかし、目の前にいるのがヴィヴィオだと分かっいても、小さいヴィヴィオにこういう事をされると背徳感と言うべきか、非常に変な気分になってくる。

かといって、本当に楽しそう嬉しそうなヴィヴィオに水を差すつもりもなく、ルシウスはヴィヴィオの好きにさせておくことにした。



「あれえ？ 起きたんだ、聖王さま」

「っ!? だれっ!?」

唐突に聞こえてきた男の声。

ルシウスのモノではない。

「ふふ。ダレだろうねえ。ダレでもいいよねえ。ふふふっ」

ネットリと絡み付くような声。

ヴィヴィオにはあまり感じたことのない物だったが、とにかく酷く不快だった。

「ただ、呼び名がないと不便かな。じゃあ、『お兄ちゃん』って呼んでね、聖王さま」

「なに!? なんなの!? なんでわたし、繋がれて……ッ!?」

「あらら。まだ混乱しているのかな。だいじよぶ、だいじよぶだよ。これからずつとイッショだから。心配しないでね、聖王さま」

ぞわり。

頭に何かが触れる感触。

見上げれば、いつの間にか触れられる程に近寄った男から伸ばされた手が。

「い、いやっ……」

「ふふっ。まだ緊張しているのかな。だいじよぶだよ、ボクがいるからね」

「やめ、て……」

「だいじよぶ、だいじよぶ。ちやんと可愛がつてあげるから。ボクの聖王さま」

そう言う男の手は頭から徐々に降りてきて、頬を撫でるようにさすっている。

きもちわるい。

きもちわるい。

きもちわるいっ！

わけも分からないまま目を覚ますと、いきなり表れた見知らぬ男。四肢が鎖に繋がれて、身動きが取れない。

狂気を感じる言葉に、全身に絡み付くような声色。

男が現れてから、ずっと全身の肌がゾワゾワしている。

「いや……っ」

とにかく訳が分からないけれど、ひたすら不愉快で、それ以上に恐かった。



6時間前。

ルシウスとヴィヴィオの二人はショーの見物のため、目的地であるシアターに来ていた。

ショーとはミッドチルダでわりと新しく出来た人気の娯楽の俗称だ。魔法技術を駆使して、観客から見えて360°。全面に背景を映し出し、その中を魔法で作った立体映像（実体あり）が飛び回る。かつての映像作品よりもずっと迫力があり、管理局の訓練スペースもこの技術が流用されているとして有名だ。

閑話休題。

「しかし、本当にこれでいいのか？」

「は、はい……」

二人の視線の先には、本日観覧する予定のショーの広告が。

暗くておどろおどろしい空の下、崩れた街並みを人体が腐敗したような人型が歩き回っている。昔からよくあるパニックホラー作品だ。

しかしその迫力は映像作品の比ではない。実際、ヴィヴィオは少し顔色が青白く、唇が震えている。

ルシウスはわりと好きなのだが、ヴィヴィオは明らかに怖がっているのだ。

「本当に大丈夫か？ 何ならこっちのファンタジーっぽいのかか……」

「いいいんですっ！ わたし、これが見たいんですっ！ さ、さあ行

きましよう……っ！」

「それならそれでいいけどな……」

ルシウスはどうしてもヴィヴィオが無理そうなら途中で出ようと思いつつ、ぎこちない歩きで先に行くヴィヴィオを小走りに追いかけた。

「ひゃっ……い！」

いきなり飛び出してきた怪物が、畏にかかった主人公に襲い掛かったシーン。

ヴィヴィオはすくみ上りつつ、何度目かも分からない悲鳴をあげた。

とてもこわい。思っていたよりもずっと。

ちらりと隣を見る。

暗くてよく見えないけれど、ルシウスはショーに集中しているようだ。しかし先ほど悲鳴をあげた時、チラリとヴィヴィオを見て、手を握ってくれた。

ヴィヴィオは舞い上がりそうなほど嬉しかった。けれど、それで終えるつもりはない。

ここで動かなきゃ、何だってこわいのを我慢してこのショーを選んだっというのか。
そう。

——こんなにこわいなら、隣にいる人に抱きついちゃってもしかたないよね。

自己正当化、完了。

あとは勇気を出すだけ。

——女は度胸、全力全開っ！

ショーではちようど、主人公を助けて怪物を撃退した愛犬が、別の怪物に食べられてしまった。

「ぎゃっ……い！」

——抱きついた。抱きついちゃった……っ！

ルシウスの顔は恥ずかしくて見れないけれど、いきなり抱きついて

きたヴィヴィオに少し驚いているみたいだ。

しかしやがて嘆息するような声が聞こえると、ゆっくり頭を撫でてくれた。

ヴィヴィオはもう有頂天だ。ちよつと調子に乗ってしまう。

「ルシウスさんも、だ、だきしめて……ください」

恥ずかしいやらなにやらで、ルシウスの顔を直視できない。

小さい声だったし、ルシウスまで声が届いたか分からなかったけれど、彼はきゅつとヴィヴィオの小さな体を抱きしめてくれた。

心臓はうるさく、彼まで聞こえてしまわないか心配になるくらい。

顔はきつとリンゴのようだ。

それでも、幸せだ。

ヴィヴィオはそのまま、ショーが終わるまでずっと抱きしめてもらっていた。

「……やつぱり」

ショーが終わり、シアターが明るくなる。

腕の中で縮こまっている少女を見ると、やはり。

幼い姿になっていた。抱きしめた時の感覚で分かってはいたが。

周りの客の視線が痛い。それはそうだ、まだ初等科くらいの少女と高等科の自分が恋人同士のように抱きしめあっているのだから。

顔立ちや髪色からどう見ても兄妹には見えないだろう、とルシウスは理解している。

それだけでなく、周りから見ると二人が抱きしめあう姿からは兄妹にはない熱量があり、兄妹ではないことは瞭然だった。

ふと、腕の中の少女がうるうる濡らした目で見上げてくる。

ドキツと心臓が跳ねた。

——反則だろ、それは……。

ルシウスは自分の中の何かから逃げるように一度深呼吸をすると、ヴィヴィオを抱く腕をほどく。

深呼吸することで、少しは落ち着いた。

「ほら、こくぞうし」

落ち着いてみると周りの視線が痛すぎて、いたたまれなくなったルシウスはヴィヴィオの手をとるとさっさと立ち上がった。

「はいっ！」

歩きながら、普段からルシウスが知る同年代の姿に戻ったヴィヴィオ。何が嬉しいのか、とてもニコニコしている。

気持ちも落ち着いてくると、ルシウスは冷静になった頭でつい先ほどのショーでの事を思い出してしまう。

小さいヴィヴィオの体は抱きしめるとすっぱり腕に収まって、しかも暖かくて柔らかい。

それに、ショーが終わった時のあの顔は……。

「……っ」

「どうか、しました？」

考えにふけるルシウスの視界に、ヴィヴィオの顔がぬつと出てきた。

「うおっ！ ……いや、なんでもない」

「そうですか」

ヴィヴィオは顔を前に戻すと、またご機嫌そうに歩き出す。

———どうか、してるよ。

さすがにお前のせいだ、とは言えないルシウスだった。



4時間前。

ショーの後、少し雑貨屋などを見て回ると、もうすっかり暗くなっってしまった。どうもヴィヴィオは門限が早いらしく、もう少ししたら解散しなければならぬ。

現在はヴィヴィオたっての願いでクラナガンの夜景が見える公園に来ている。

辺りはまばらに人がいるのみで、静かなものだ。

「それで、話したいことって？」

そう、ヴィヴィオがどうしても静かな場所で話したいことがあると

言うので、ここに来た。

話したい事の内容は、ルシウスにもなんとなく分かっている。しかしルシウスとしてもいい機会だと思った。

ルシウスも彼女に伝えたい事があるのだ。

「はい、あの、えと……」

ヴィヴィオはもじもじと俯いたりしている。

——いや、女の子にやらせちゃダメだろ。

せっかくここまでヴィヴィオが勇気を出してくれたのだ。

ここからは男の仕事だ、とルシウスも改めて決心した。

「いや、まずは俺の話聞いてくれるか?」

「ふえ……?」

ヴィヴィオは虚を突かれたような顔をしたが、構わない。

「俺は、ヴィヴィオ、君のことが……」

「あつー。ちよつ、ちよーつと待つてくださいい!」

しかしルシウスの決意をヴィヴィオの声が遮った。

ヴィヴィオとしては、先に自分が話さなければならぬことがあるのだ。さんざん隠してきてしまったけれど、隠し事をしたままでその関係になるのは流石に不誠実だ、とヴィヴィオは思っている。

「わ、わたしが先に少し話したいことがあるんです」

「……そうか、分かったよ」

「あの、えと……」

しかしいざ隠し事を告白する段になって勇気が出るかは別だ。どうしても、言葉に詰まってしまう。

そんなヴィヴィオを優しい目で見つめるルシウスを見ると、今さらながらに隠し事をしている罪悪感が膨らんで、口が重たくなってしまふのだ。

「ちよ、ちよーつとまずはお手洗いに行ってきます。ま、待つてくださいい!」

ヴィヴィオは一回気を落ち着かせるため、少し席を外すことにした。

何度も深呼吸しながらお手洗いに入って、首の後ろ辺りに痺れを感じ

じて。

それがヴィヴィオの最後の記憶だ。



「くふ、くふふ」

にたにた笑いながらヴィヴィオの頬を撫でていた男。

そんな彼もヴィヴィオの呆然とした視線に気が付いたようだ。

「ん？ ああ、ゴメンね、聖王さま。放っておいたワケじゃないんだよ。くふふ。ちやあんと可愛がつてあげるからね」

そこでふと、男が不快そうな顔をした。

「……なんだよ、ジャマするなよ。え？ チツ、待ってる、すぐ行く」
どうやらどこかと通信しているようだ。

「ごめんね、聖王さま。ちよつと待っててネ」

どうやらどこかへ行ってくれるようだ。

しかし安心なんてとても出来ない。

ヴィヴィオには分かってしまったのだ。

これから自分が何をされるのか。

男の視線を感じて。

下手に知識があつたから、理解できてしまった。

やだ。

いやだよ。

たすけて。

だれか、たすけて。

ママ。ママ。

なのはママ。フエイトママ。

るしうす、さん……。

ヴィヴィオの目からは再び、一筋の雫が零れた。